

一般国道
210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 5 集

つかんどう
塚 堂 遺 跡 V

E地区 (1・3～6地点)

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査

1 9 8 8

福岡県教育委員会

第 5 集

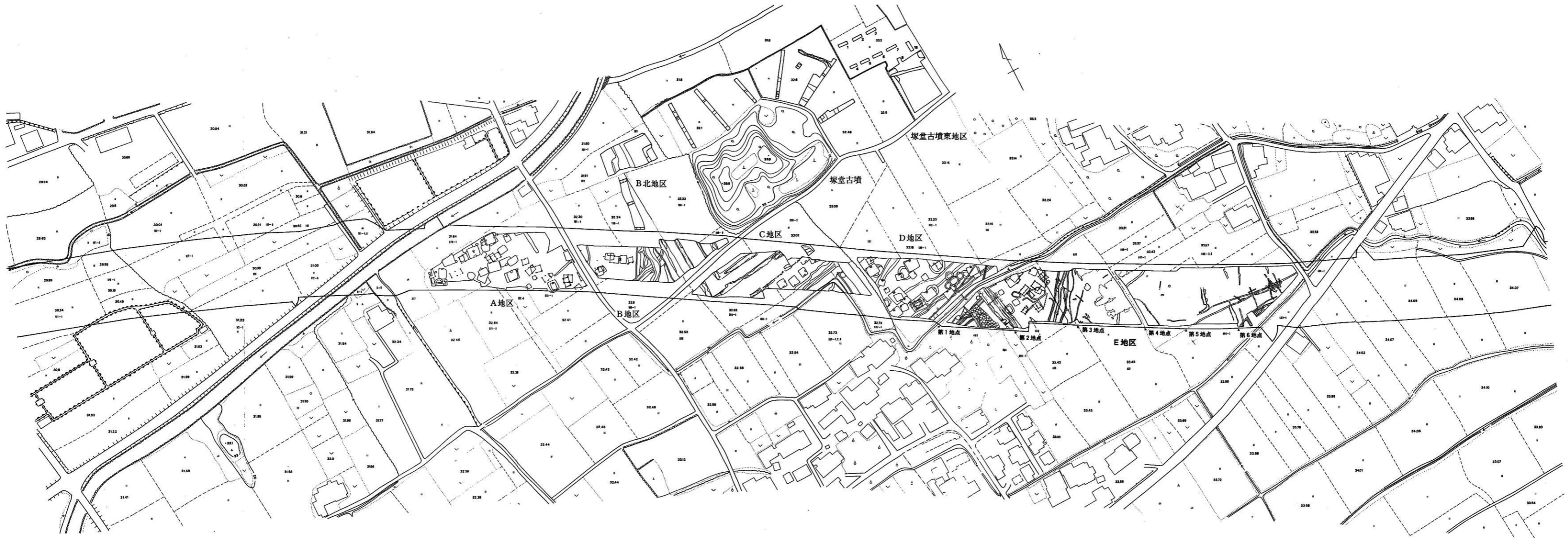
つかんどう
塚 堂 遺 跡 V

E地区 (1, 3~6地点)

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査

付 図

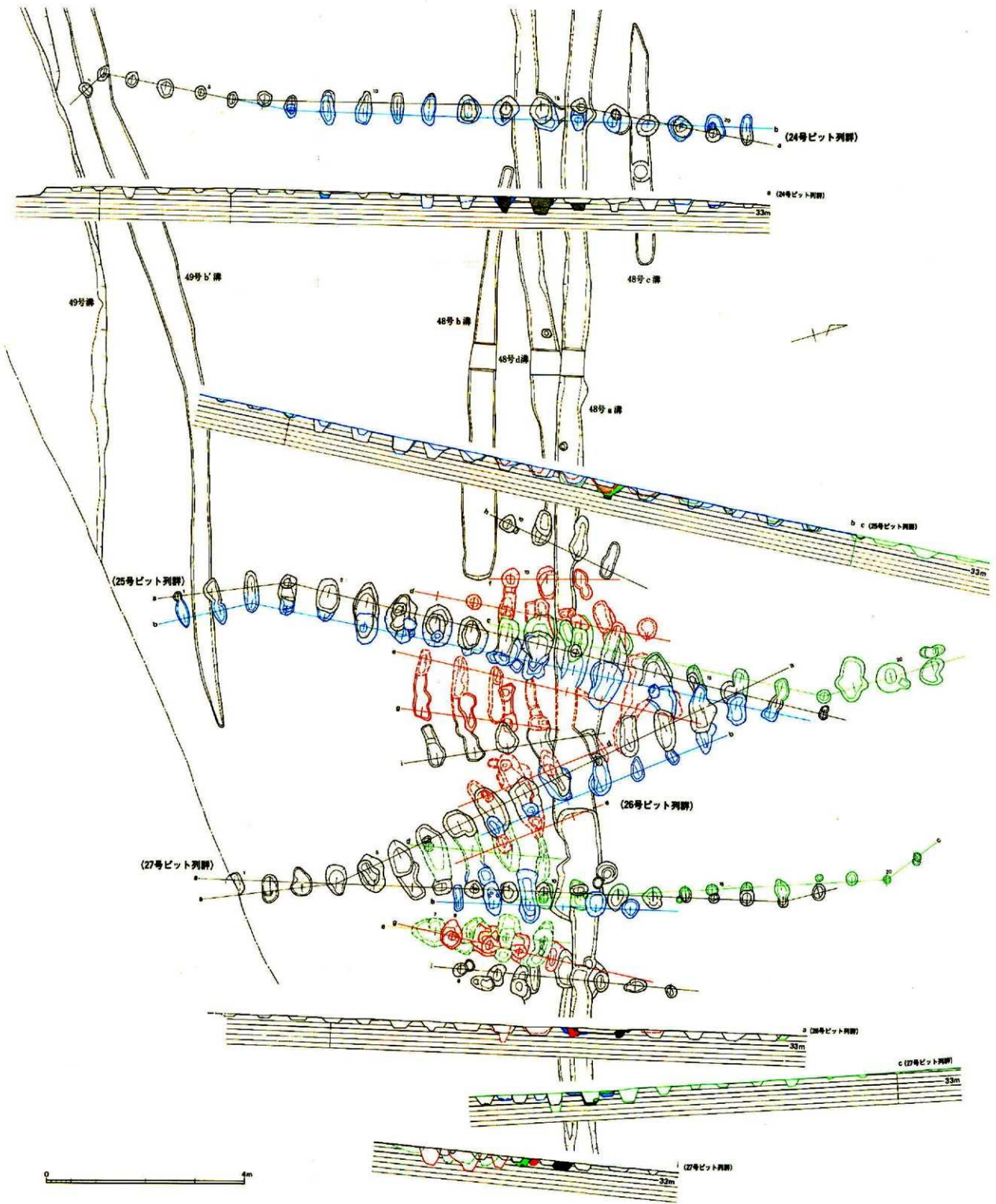
- 付図 1 一般国道210号線浮羽バイパス路線図と塚堂遺跡各調査地区の位置 (1/1,000)
付図 2 E地区第3~6地点遺構配置図 (1/200)
付図 3 24~27号ピット列群実測図 (1/60)



付図1 一般国道210号線浮羽バイパス路線図と塚堂遺跡各調査地区の位置 (1/1,000)



付図2 E地区第3～6地点遺構配置図 (1/200)



付圖 3 24~27号ピット列群出土位置実測図 (1/60)

塚 堂 遺 跡 V

E地区 (1・3～6地点)

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査

序

本書は、一般国道210号線浮羽バイパス建設に伴ない、福岡県教育委員会が建設省から委託を受けて実施している埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

今回の報告書は、昭和59年度及び昭和61年度に調査した塚堂遺跡E地区（1・3～6地点）についての成果を『塚堂遺跡V』としてまとめたものであります。

本書が、文化財への親しみと活用に御利用いただければ幸甚に存じます。

なお、発掘調査にあたり、御尽力をいただいた地元の方々及び関係各位に深甚の謝意を表する次第であります。

昭和63年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 竹井 宏

例 言

1. 本書は、1979年度以来、福岡県教育委員会が建設省から委託を受けて、一般国道210号線浮羽バイパス建設に伴い破壊される埋蔵文化財の発掘調査を実施した遺跡の第5冊目の報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、福岡県浮羽郡吉井町所在の「塚堂遺跡」で、バイパス建設予定地内のE地区第1・3～6地点を、「塚堂遺跡 V」として報告するもので、第2地点については、1984年に「塚堂遺跡 III」として報告している。
3. 第1地点の調査は、福岡県教育庁管理部文化課主任技師 馬田弘稔が担当し、第3～6地点の調査は、同 橋口達也・馬田が担当した。
4. 調査後の整理は、文化課太宰府事務所で行われ、遺物の復原作業には、整理作業班員 森山シズ子があたり、遺物の実測作業には、整理補助員 大田育子があたった。
また、遺物写真の撮影作業には、整理補助員 須原悦子があたり、遺構・遺物図面の整理は馬田、製図は整理補助員 豊福弥生・原カヨ子があたった。
5. 本書の編集・執筆は、馬田が担当した。

本文目次

序

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と調査組織	1
1. 調査の経過	1
2. 調査の組織と関係者	5

第2章 E地区第1地点の調査

第1節 はじめに	9
第2節 出土遺構	9
1. 土壇	9
31号土壇	9
32・33号土壇	11
34・35号土壇	12
2. 溝状遺構	13
31号溝状遺構	14
32号溝状遺構	14
33・37号溝状遺構	14
34号溝状遺構	14
35号溝状遺構	16
36・38号溝状遺構	16
39号溝状遺構	17
3. 柱穴様小ピット列	18
31号柱穴様小ピット列	18
32号柱穴様小ピット列	18
第3節 出土遺物	19
1. 土壇出土の遺物	19
31号土壇出土遺物	19
32・33号土壇出土遺物	20
34・35号土壇出土遺物	22
2. 溝状遺構出土の遺物	23
31号溝状遺構出土遺物	23
32号溝状遺構出土遺物	23

33・37号溝状遺構出土遺物	24
34号溝状遺構出土遺物	24
35号溝状遺構出土遺物	24
36号溝状遺構出土遺物	24
38号溝状遺構出土遺物	25
39号溝状遺構出土遺物	25

第3章 E地区第3～6地点の調査

第1節 はじめに	26
第2節 出土遺構	26
1. 住居跡	26
21号住居跡	28
22号住居跡	31
2. 掘立柱建物	33
21号掘立柱建物	33
3. 土壇	34
21号土壇	35
22号土壇	35
23号土壇	36
24号土壇	36
25号土壇	36
26号土壇	37
27号土壇	37
4. 溝状遺構	38
21号溝状遺構	38
22号溝状遺構	39
23号溝状遺構	39
24号溝状遺構	40
25号溝状遺構	40
26号溝状遺構	40
27号溝状遺構	41
28号溝状遺構	41
29号溝状遺構	41
30号溝状遺構	41

41号溝状遺構	42
42号溝状遺構	42
43・44号溝状遺構	43
45号溝状遺構	43
46号溝状遺構	43
47号溝状遺構	43
48号溝状遺構	43
49号溝状遺構	44
5. ビット列群	46
21号ビット列群	46
22号ビット列群	47
23号ビット列群	49
24号ビット列群	49
25号ビット列群	50
26号ビット列群	51
27号ビット列群	52
第3節 出土遺物	56
1. 住居跡出土の遺物	56
21号住居跡出土遺物	56
22号住居跡出土遺物	56
2. 掘立柱建物出土の遺物	57
21号掘立柱建物出土遺物	57
3. 土壇出土の遺物	57
24号土壇出土遺物	57
4. 溝状遺構出土の遺物	57
21号溝状遺構出土遺物	57
22号溝状遺構出土遺物	58
25号溝状遺構出土遺物	61
48号溝状遺構出土遺物	61
49号溝状遺構出土遺物	62
5. ビット列群出土の遺物	65
23号ビット列群出土遺物	65
24号ビット列群出土遺物	66

25号ピット列群出土遺物	66
26号ピット列群出土遺物	66
27号ピット列群出土遺物	66

第4章 おわりに

第1節 縄文時代の遺構と遺物	67
第2節 弥生時代の遺構と遺物	68
第3節 古墳時代の遺構と遺物	70
第4節 奈良時代以降の遺構と遺物	71
第5節 おわりに	74

図 版 目 次

- 図版1 南東上空から見た塚堂遺跡（A～E地区）とバイパス建設予定地〔1979年12月撮影〕（1. 塚堂古墳 2. 日の岡古墳 3. 月の岡古墳 4. 塚堂古墳東地区 5. 筑後川）
- 図版2 1. E地区第1地点全景とA～D地区（南東から）
2. 第2地点全景とA～E（第1地点）地区（南東から）
- 図版3 E地区第3～5地点全景とA～E（第1・2地点）地区（南東から）
- 図版4 1. E地区第1地点全景と第2～6地点（北西から）
2. 同第3～5地点全景とバイパス予定地（北西から）
- 図版5 1. E地区第6地点全景（北西から）
2. 同第3～5地点全景（北西から）
- 図版6 1. E地区第1地点全景（東から）
2. 同（北から）
- 図版7 1. 34号土壇断面（西から）
2. 31～33号土壇、32～36・38号溝状遺構（北から）
- 図版8 1. 31号土壇断面（西から）
2. 31号土壇、31・33～35・38号溝状遺構（北から）
- 図版9 1. 32・33号土壇断面（西から）
2. 32号土壇、31・33～38号溝状遺構（東から）
- 図版10 1. 34・35号土壇、31・34・35・37号溝状遺構（東から）
2. 34・35号土壇、31・34・35・37・39号溝状遺構の合流部（東から）
- 図版11 1. 39号溝状遺構第4トレンチ断面（南から）
2. 同第5トレンチ断面（南から）
- 図版12 1. 39号溝状遺構第7トレンチ断面（南から）
2. 31号溝状遺構断面（西から）
- 図版13 1. 35号溝状遺構から見た耳納山地（北から）
2. 36号溝状遺構から見た朝倉山塊（南から）
- 図版14 1. 第3地点21号住居跡（東から）
2. 同（西から）
- 図版15 1. 22号住居跡（南から）
2. 21号掘立柱建物、21～23号土壇、24号溝状遺構（東から）
- 図版16 1. 22～24号土壇、21～23・42・44号溝状遺構（南東から）

2. 24号土壇, 21~23・42・44号溝状遺構 (南西から)
- 図版17 1. 22号溝状遺構遺物出土状態 (南西から)
2. 同 (北西から)
- 図版18 1. 第4地点, 第5地点全景 (南東から)
2. 第6地点49号溝状遺構断面 (東から)
- 図版19 1. 第3地点25号土壇・26号溝状遺構, 第4地点26号土壇・22号ピット列群 (東から)
2. 第6地点28~30・48・49号溝状遺構, 23~27号ピット列群 (西から)
- 図版20 第1地点31号土壇出土土器①
- 図版21 31号土壇出土土器②
- 図版22 31号土壇出土土器③ 39号溝状遺構出土土器
32~34・36・39号溝状遺構出土土器 表探土器
- 図版23 32~34号土壇出土土器 34・36号溝状遺構・近世墓出土土器
- 図版24 第3地点22号溝状遺構出土土器
- 図版25 第3地点22号溝状遺構出土土器 第6地点49号a溝状遺構出土石鍋・土器
第5地点49号e溝状遺構出土土器

挿 図 目 次

第 1 図	塚堂遺跡の位置と主要遺跡……………	1
第 2 図	E 地区第 1 地点遺構配置図 (1/200,000) ……	10
第 3 図	31-33号土壇・31-38号溝状遺構実測図 (1/60) ……	10-11間
第 4 図	34・35号土壇, 31・37号溝状遺構実測図 (1/40) ……	12
第 5 図	31・34-37号溝状遺構, 32号柱穴様小ピット列実測図 (1/60) ……	15
第 6 図	39号溝状遺構 (大溝 1-3) 土層断面図 (1/40) ……	16-17間
第 7 図	32号柱穴様小ピット列実測図 (1/60) ……	18
第 8 図	31号土壇出土土器実測図 (1/3) ……	21
第 9 図	32・33号土壇出土土器実測図 (1/3) ……	22
第 10 図	34号土壇出土土器実測図 (1/3) ……	22
第 11 図	31 (7), 33 (5), 34 (1・4・12), 36 (2・3・8・10), 39 (6・9・11) 号溝状遺構出土土器実測図 (1/3) ……	23
第 12 図	34号溝状遺構内近世墓出土土器実測図 (1/3) ……	24
第 13 図	表採土器実測図 (1/3) ……	25
第 14 図	住居跡模式図と柱穴間距離計測例図……………	27
第 15 図	E 地区第 3 地点 21号住居跡実測図 (1/60) ……	29
第 16 図	22号住居跡実測図 (1/60) ……	32
第 17 図	21号掘立柱建物実測図 (1/60) ……	34
第 18 図	21号土壇実測図 (1/40) ……	35
第 19 図	22・23号土壇実測図 (1/40) ……	35
第 20 図	25号土壇実測図 (1/40) ……	36
第 21 図	26号土壇実測図 (1/40) ……	36
第 22 図	27号土壇実測図 (1/40) ……	37
第 23 図	24号土壇, 21-23・42号溝状遺構実測図 (1/60) ……	38-39間
第 24 図	26号溝状遺構実測図 (1/60) ……	40
第 25 図	49号溝状遺構実測図 (1/60) ……	44-45間
第 26 図	21号ピット列群実測図 (1/60) ……	47
第 27 図	22号ピット列群実測図 (1/60) ……	48
第 28 図	23号ピット列群実測図 (1/60) ……	49
第 29 図	24号土壇出土土器実測図 (1/3) ……	57
第 30 図	21 (2・3)・22 (4)・25 (1) 号溝状遺構出土土器実測図 (1/3) ……	59

第 31 图	22号溝状遺構出土土器実測図 (1/3)	60
第 32 图	48号 a 溝状遺構出土土器実測図 (1/3)	62
第 33 图	49号 a 溝状遺構 (上層) 出土土器実測図 (1/3)	63
第 34 图	49号 a 溝状遺構 (上層) 出土石鍋実測図 (1/3)	64
第 35 图	49号 a 溝状遺構 (下層) 出土土器実測図 (1/3)	64
第 36 图	49号 a 溝状遺構出土土器実測図 (1/3)	65
第 37 图	49号 c' (1~6)・e (7) 溝状遺構出土土器実測図 (1/3)	65

表 目 次

表 1	塚堂遺跡調査地区一覧表	6～7 間
表 2	31号土壇出土土器計測表	20
表 3	32・33号土壇出土土器計測表	20
表 4	住居跡模式計測表	27
表 5	21号A（新）住居跡計測表	30
表 6	21号B（古）住居跡計測表	30
表 7	22号住居跡計測表	31
表 8	21号掘立柱建物計測表	33
表 9	21号ピット列群計測表	53
表 10	22号ピット列群計測表	53
表 11	23号ピット列群計測表	53
表 12	24～27号ピット列群計測表	54・55
表 13	22号溝状遺構出土土器計測表①	58
表 14	22号溝状遺構出土土器計測表②	58
表 15	49号 a 溝状遺構（下層）出土土器計測表	62
表 16	49号 a 溝状遺構（上層）出土土器計測表	63
表 17	円形住居プラン計測表	69

付 図 目 次

付図 1	一般国道210号線浮羽バイパス路線図と塚堂遺跡各調査地区の位置 (1/L,000) 〔石山勲・副島邦弘・新原正典・佐々木隆彦・小池史哲・馬田作成〕
付図 2	E地区第3～6地点遺構配置図 (1/200)
付図 3	24～27号ピット列群実測図 (1/60)

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と調査組織

1. 調査の経過

『塚堂遺跡』は、福岡県浮羽郡吉井町大字官田・徳丸に所在する(第1図)。

調査は、福岡県教育委員会が、『一般国道210号線浮羽バイパス』建設に伴い、破壊される埋蔵文化財として、建設省の委託を受けて、1979年度以降発掘を実施してきたもので、86年度までに、A～E地区にわたる遺跡の調査のすべてを終了し(図版2-1・4-2, 付図1), 4冊の報告書を刊行している(表1)。

調査に至る経過は、上記報告書の『塚堂遺跡Ⅰ』に収録し、A～D地区・E地区第2地点の調査の経過については、同書や『塚堂遺跡Ⅱ』・『塚堂遺跡Ⅲ』・『塚堂遺跡Ⅳ』に収録されているため、本書ではE地区第2地点についてのみ概要を再録し、第1・3～6地点については調査日誌を記す。

1次調査(E地区第2地点)

第2地点(字曲金456番地, 字屋敷459-1・461-1・2番地)の調査は、1982年7月から10月まで、A地区北地点の調査と併行して実施した。

E地区の調査は、当初、D地区に南接する第1・2地点を計画していたが、バイパス建設予定地交渉の進行に従い、第2地点のみの調査となった。

このため、排土置場確保の関係から、東半部の調査後に排土を反転して、西半部の調査を行なった。

また、東半部の表土除去の際に、重機(ユンボ)を使用して第3地点(452番地)に試掘溝を設け、西半部の排土反転の際に、同様に第1地点(461-1・2番地)にも試掘溝を設けた。

第1地点の試掘溝は、後述する39号溝状遺構と平行する34号溝状遺構上にはほぼ一致したもので、近世墓によって大半が攪乱されていることを確認し、第3地点の試掘溝では、後述する瓦粘土探掘坑と若干の柱穴様小ピットを確認した。

2次調査(E地区第3～6地点)

第3地点(字曲金451・452番地), 第4地点(同446-1・2・5, 447-1番地), 第5地点(同444-1・446-1～3番地), 第6地点(同444-1・446-1・2番地)の調査は、1984年8月27日から12月5日まで実施した。

本年度の調査は、期間が路線外の水田稲作付期と一致し、路線内を流れる農業用水路の確保が必要となり、また、面積が5250m²（幅35m・長さ150m）と広く、その排土置場の確保の関係から、上記のように4地点に区分することになった。

表土（水田耕作土・床土）の除去に重機（ユンボ）を使用し、当初、第3地点の排土置場を既調査の第2地点とし、第4・5地点の排土置場を第6地点としたが、第4地点の排土量が多くなり、第4・6地点の排土置場を第5地点に確保し、第6地点終了後に、排土を第6地点に反転して調査を行なった。

- 8月27日 本日から、E地区第3地点の調査を開始する。
重機で西側路線境界に沿って試掘溝を設け、両側から表土除去を行なう。（各地点の旧地主との境界確認・挨拶。吉井町教育委員会・県文化財保護指導員への調査開始の連絡。）
- 8月28日 調査地区外の水田からの流入水が多いため、第2地点への排水溝を設けると共に、畦畔の修復作業を行なう。
- 8月29日 東半部で、第1次調査時の試掘溝で確認していた瓦粘土探掘坑を検出する。探掘坑は2m以上の深さがあり、探掘坑部分の遺構は完全に消滅している。（指導員の佐藤力氏来訪。）
- 8月30日 第2地点で調査していた1～3号溝状遺構（以下、溝と略す）の延長部を確認。
- 8月31日 トイレを設営する。
- 月1日 発掘用品一式を搬入。
- 9月3日 本日から、作業員を雇用する。（テント設営中の降雨著しく、作業中止。）
- 9月4日 テント設営後、降雨著しく、作業中止。（第3地点が水没。）
- 9月5日 ポンプによる排水作業に、13:00時まで要す。（15:00時、降雨につき、作業中止。）
- 9月6日 本日から、遺構検出作業を開始する。南西部で、21～23号溝・柱穴横小ピット、検出。
- 9月7日 21～23号溝の南半部から、発掘を開始する。22号溝で、ややまとまった土師器片が出土。21・23号溝からは、若干の土器片が出土。（15:00時、降雨につき、作業中止。）
- 9月8日 第2地点の1/3が水没する。（降雨にて作業中止。）
- 9月10日 22号溝床面で、完形杯が出土する。21～24、42a・c号溝のセクション堤以南の発掘、ほぼ終了。
- 9月11日 第3地点の表土除去作業が、終了する。21～24、42a・c号溝のセクション堤以北、発掘開始。

- 9月12日 22号溝中央部で、須恵器・石群が出土する。23号溝の発掘、終了。
- 9月13日 21号掘立柱建物・24号溝を掘り始める。22号溝、21・22号土坑、発掘終了。第4地点の表土除去作業、開始。
- 9月14日 25・43a・44号溝、および柱穴様小ピットを掘り始める。
- 9月17日 25号溝の発掘が終わる。
- 9月18日 調査日誌の整理をする。(降雨につき、作業中止。)
- 9月19日 22号住居を掘り始める。(建設省北九州国道工事事務所から、事務連絡。)
- 9月20日 22号住居以南の柱穴様小ピットを掘り始める。
- 9月22日 42・43号溝南端部に設けていた排水溝を除去し、調査区を拡張する。
- 9月25日 第3地点の南東部に散水後、遺構を検出する。(地区外の水田からの湧水が著しく、上述の拡張区水没。)
- 9月26～28日 第3地点の北東部の遺構を掘り始める。既述の瓦粘土探掘坑プラン、5cmのみ掘り下げ。
- 9月29日 21号住居・26号溝を掘り始める。
- 10月1日 第3地点の実測用杭打ち作業を開始する。26号溝、発掘終了。
- 10月3日 第4地点の遺構検出作業を開始する。(15:20時、降雨につき、作業中止。)
- 10月4日 第6地点の発掘作業を開始する。第3地点、遺構実測開始。(前指導員 金子文夫氏来訪。)
- 10月5日 26号ピット列群を掘り始める。21号住居、床面検出。
- 10月6日 25号ピット列群を掘り終わる。(作業員、賃金支払い。)
- 10月8日 41・48号溝を掘り始める。
- 10月9・10日 第3地点を実測する。
- 10月12日 49号溝を掘り始める。48号溝、発掘終了。28・29号溝、検出。
- 10月13日 49号溝・25号ピット列群を掘り下げる。
- 10月15日 28・29号溝を掘り始める。
- 10月16～18日 第3地点を実測する。第3・6地点の気球写真撮影のため、各地点清掃作業。
- 10月19日 第3・6地点の気球写真を撮影する。
- 10月22日～11月3日 第4・6地点を発掘する。
- 11月5～8日 第6地点の遺構を実測する。
- 11月9日 第3地点の遺構個別写真撮影のため、清掃作業をする。第6地点、実測。第5地点排土、第6地点に移動。
- 11月10日 第4地点の実測用杭打ち作業を開始する。
- 11月12日 第5地点の発掘作業を開始する。

- 11月13日 第5地点の南半部を掘り下げる。(吉井町教委から、事務連絡。)
- 11月14日 第5地点の中央部を掘り下げる。
- 11月15日 降雨につき、発掘作業を中止する。
- 11月16日 第5地点の北半部を掘り下げる。本日から、第4地点実測。
- 11月20日 第5地点の実測作業を開始する。
- 11月22～25日 第5地点の中央部を掘り下げる。第4地点、実測。
- 11月26日 第5地点の中央部・北端部を掘り下げる。
- 11月27日 第5地点東半部の清掃が終わる。第4地点、実測。
- 11月28日 第5地点の実測用杭打ち作業を開始する。第4地点、実測終了。第3地点西半部・第5地点西半部、清掃終了。(13:00～15:00時、現地説明会。約90名参加。)
- 11月29日 第3地点に散水する。第3地点東半部・第4地点、清掃。
- 11月30日 E地点第3～6地点の発掘作業を終了する。発掘用品一式、搬出。
- 12月1～5日 重機(ユンボ・ブルドーザー)を使用し、現場埋めもどし作業をする。
- 3次調査(E地点第1地点)**
- 第1地点(字屋敷459-1・460・461-1・2番地)の調査は、1986年12月12日から1987年1月15日まで実施した。
- 12月12日 今日から、E地区第1地点の調査を開始する。
表土の除去に重機(ユンボ)を使用し、排土置場を既調査の第2地点とし、西側路線境界に沿って試掘溝を設ける。
試掘溝壁の土層観察では、表土(耕作土)の厚さは20～40cmあり、表土下の遺物包含層から32・34～36・38号溝状遺構(以下、溝と略す)の掘り込みが認められたが、これら遺構上層埋土と遺物包含層では、わずかに後者がより砂質土であるだけで、共にほとんど遺物の出土がなく、特に34・38号溝上層埋土は比較的新しいと判断されたので、この遺物包含層も重機で除去することにする。
- 12月13日 82年度に設けられた39号溝の第1～4トレンチ内の埋め土を、重機で除去する。
- 12月14日 重機による排土の移動を終了する。
- 12月15日 吉井町教育委員会・県文化財保護指導員への調査開始の挨拶、作業員への連絡を終え、太宰府事務所が発掘用品一式を整える。
- 12月16日 今日から、作業員を雇用する。発掘用品一式を搬入し、テントを設営し、遺構検出作業を西半部から開始する。
- 12月17日 今日から、遺構発掘作業を開始し、38号溝西半部、36号溝南・北部を掘り下げる。
- 12月20日 31号土壇、32号古・34号新・36号溝を掘り下げる。近世墓(以下墓と略)の一部

- 発掘終了。
- 12月22日 31号土壇の発掘終了し、32号土壇を掘り下げる。34・35号溝を掘り始めるが、墓による攪乱が著しい。墓から埋葬骨の一部が出土する。
 なお、埋葬骨の一部が出土したため、バイパス建設工事業者が慰霊祭を実施したいとの申し出る。
- 12月23日 東半部の遺構の発掘を開始する。
- 12月24日 32号土壇をほぼ完掘し、33号土壇西半部上層から瓦器碗破片が出土する。39号溝の第3・4トレンチ埋め土除去作業終了。
- 12月25日 調査日誌を整理。(降雨にて、作業中止。)工事関係者が慰霊祭を実施。
- 1月6日 39号溝第5～8トレンチの発掘を開始する。
- 1月8日 気球写真撮影のため、調査区を清掃する。
- 1月9日 気球写真を撮影する。
- 1月10日 遺構実測作業を開始する。
- 1月12日 発掘用品一式を撤収する。
- 1月15日 33号土壇を実測し、第1地点の調査を終了する。

2. 調査の組織と関係者

調査の組織と関係者は、下記のとおりである。

1984年度2次調査 (E地区第3～6地点)

[建設省九州地方建設局福岡国道四事事務所]

所長	沢山民牟			
副所長	寺崎 学			
工務課課長	堂園良光			
第一係長	松下敏男			
第二係長	古賀一征			
第三係長	緒方良一			
調査課課長	松嶋憲昭			
調査係長	小野義春			
建設監督官	久原義宣	後藤博義	末安一善	久良木裕

[福岡県教育委員会]

総括 教育長	友野 隆
教育次長	安部 徹

	管理部部长	伊藤博之		
	管理部文化課課長	前田栄一		
	課長補佐	中村一世		
庶務	管理部文化課庶務係長	松尾 満	主任主事 (担当)	川村喜一郎
調査	管理部文化課調査第二係長	栗原和彦	技術主査 (担当)	橋口達也
			主任技師 (担当)	馬田弘稔
			主任技師	佐々木隆彦

1986年度3次調査 (E地区第1地点)

[建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所]

	所長	森 寛昭		
	副所長	猪須哲夫		
	工務課課長	小林 允		
	第一係長	米原利幸		
	第二係長	古賀一征		
	第三係長	緒方郁夫		
	調査課課長	徳永和幸		
	調査係長	後藤昌隆		
	建設監督官	尾中正臣	中馬正昭 下川勲 永田恭一 井上喬	

[福岡県教育委員会]

総括	教育長	友野 隆		
	教育次長	竹井 宏		
	指導第二部部长	湖上雄幸		
	指導第二部文化課課長	窪田康徳		
	課長補佐	平 聖峰		
	課長技術補佐	宮小路賀宏		
	参事補佐	栗原和彦		
庶務	指導第二部文化課庶務係長 (兼務)	平 聖峰		
	事務主査 (担当)	竹内洋征		
調査	指導第二部文化課参事補佐 (総括)	柳田康雄		
	主任技師 (担当)	馬田弘稔		
	技師	緒方 泉		

なお、1987年度の整理報告をするにあたっての組織と関係者は、下記のとおりである。

[建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所]

表1 塚堂遺跡調査地区一覧表

調査地区	調査期間	大字	小字	地 番	調査対象面積	調査面積	調査者	報告書 (編集)	(執筆分担)		
A地区	1981年7月~12月	宮田	四太郎	574-2 575-1	884㎡	765㎡	馬田弘徳 小池史智(児玉真一) ※1	第2集 (岡島)	I-1-(2)-2, II-III (岡島)		
	1982年4月~9月			576-1	1,545㎡	1,225㎡	岡島邦弘 馬田 佐々木隆彦 ※2		I-1-(1) II (馬田)		
	1985年7月			577-1 579-1-2	1,218㎡	118㎡	柳田康雄 馬田		※12	II (小池)	
B地区	1981年8月~12月	徳丸	西	159-1 160-1 161-1	2,377㎡	1,392㎡	馬田 小池 浜田信忠 伊崎俊次 ※3	第1集 (馬田)	第1・2章, 4章1・3節 (馬田) 第4章2節 (小池・馬田) 第6章, 8章1・2節 (馬田)		
C地区	1980年5月~11月	宮田	四太郎	552-1・2 555 556-1 557-1・2 558-1・2 2014	3,382㎡	1,774㎡	栗原和彦 馬田 池辺元明 ※4	第4集 (馬田)	第6章, 8章1・2節 (馬田)		
D地区	1980年5月~ 1981年3月	徳丸	西	147 149-1 150-1 151	2,479㎡	1,832㎡	栗原 馬田 川述昭人 池辺 (柳田 川述昭人) 池田 新藤正義 ※5	第4集 (馬田)	(馬田)		
E地区	1982年7月~10月	宮田	西	自 金	456	506㎡	506㎡	岡島 馬田 佐々木	第3集 (佐々木)	I, II-2-(6・7) (岡島) II-1・2-(1-5), III(佐々木)	
				屋 敷	459-1 461-1・2						第1地点
	1984年8月~12月			自 金	451 452	第3地点	4,810㎡	3,966㎡	橋口達也 馬田 (宮小路賢宏) 佐々木	第5集 (馬田)	(馬田)
				446-1・2・5 471-1	第4地点						
				446-1-3 444-1 446-1・2	第5地点 第6地点						
1986年12月~ 1987年1月	屋 敷	459-1 460 461-1・2	第2地点	1,278㎡	1,190㎡	馬田	第8集 ※8				
塚堂古墳	1979年7月~8月	徳丸	西	158-1 159-1 160-1・3			石山 齋 新原 川述	第9集 ※9			
	1979年9月~12月	宮田	四太郎	558-1・2			石山 (橋口) (浜田 馬田 児玉 池田)	第10集 ※10	第3章 (石山)		
	1981年7月~8月			162 163			石山 馬田 (児玉)	第1集 (馬田)			
	1981年9月			159-1 160-1			小池 馬田		第4章2節3・4 (小池)		
B北地区	1982年9月	徳丸	西	159-1			小池 馬田		第4章, 8章3節 (小池)		
塚堂古墳 東地区	1979年7月~8月	徳丸	西				新原 川述 (石山)	第11集 ※11	第7章 (新原)		

浮羽バイパス路線内の塚堂古墳・塚堂遺跡A~E地区の調査対象面積計18,479㎡, 調査面積計12,768㎡

※1~11には, 調査補助員として日高正幸が, ※8には岡高田一弘が, ※10には岡片岡安二の協力もあった。※12 調査の結果, 遺構は削平をうけて消滅していた。

所長	朝倉 肇			
副所長	森 久			
工務課課長	谷本誠一			
第一係長	河野良行			
第二係長	石橋彦実			
第三係長	緒方郁夫			
調査課課長	岩屋信一郎			
建設監督官	尾中正臣	中馬正昭	下川勲	西原広寿 井上喬
〔福岡県教育委員会〕				
総括 教育長	竹井 宏			
教育次長	大鶴英雄			
指導第二部部长	大平岩男			
指導第二部文化課課長	窪田康徳			
課長補佐	平 型峰			
課長技術補佐	宮小路賀宏			
参事補佐	栗原和彦	柳田康雄	加藤俊一	
庶務 指導第二部文化課庶務係長(兼務)	加藤俊一			
整理 教育庁北九州教育事務所技術主査	馬田弘稔			

第2章 E地区第1地点の調査

第1節 はじめに

E地区の調査は、第1章で記したように、1982年度の1次調査（第2地点）、85年度の2次調査（第3～6地点）、86年度の3次調査（第1地点）と分割して実施し、この間、第2地点のみが2・3次調査以前に「塚堂遺跡Ⅲ」で単独に報告されている。

また、3次調査時には、「塚堂遺跡Ⅲ」で報告された大溝1～3の一部を再度発掘し、2次調査時には、同書で報告された1号掘立柱建物・溝1～3の一部を再度発掘した。

以上のことから、2・3次調査報告では、同書報告に若干の新知見が加わるようになった。

このため、同書で報告された遺構名称・番号は、これをそのまま1次調査報告（発掘）の遺構のものとして残し、本書では、2次調査で出土した遺構に21～30・40～49の番号を付し、3次調査で出土した遺構に31～39の番号を付すことにした。

したがって、第1地点の大溝1・大溝2・大溝3は、本書では以下、39号古溝・39号中溝・39号新溝と記し、新たに確認した溝状遺構を39号最古溝とした。

第2節 出土遺構

第1地点では、土壇が5基、溝状遺構が9条、柱穴様小ピット列が2箇所それぞれ出土したが、遺構間の重複に加えて、調査区内の50基以上の近世墓による攪乱が著しかった。

1. 土壇

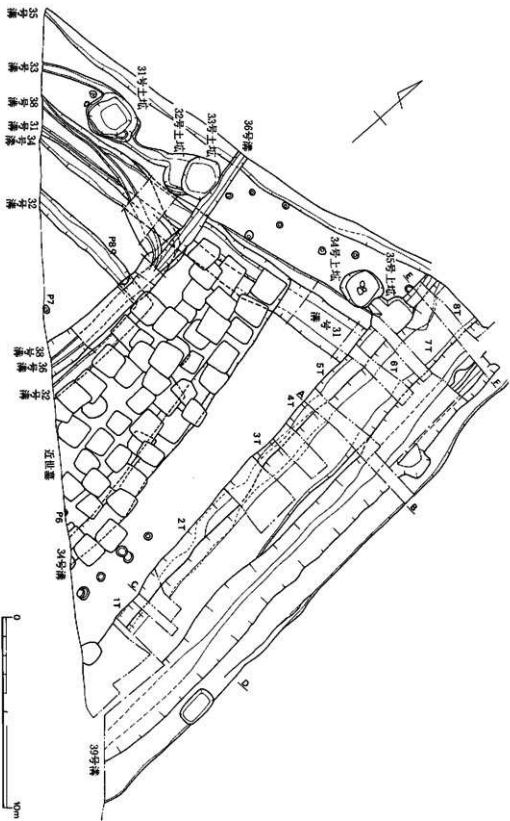
土壇は、31～35号の5基が、いずれも溝状遺構（以下、溝と略す）と重複して検出されたが、遺構間の、切り合い関係による新・旧を古→新で示せば、以下のとおりである。

32・33号土壇→34号溝→38号溝→36号溝

37号溝→34・35号土壇→39号古溝

31号土壇（図版7-2・8-2、第3図）

検出上面プランは、244×272cmの隅丸長方形に近い形状を呈すが、約20cm下では212cmの



第 2 图 E 地区第 1 地点总图配置图 (1/200)

隅丸方形となり、床面プランと一致する。

下位プランでの主軸はN-95.5°-E、検出上面から床面までの深さは73cmを測り、床面標高は32.06mである。

埋土の観察では、19・20層が粘質土、21～23層が砂、24・25層が粘質土、26・27層が砂で、砂と粘質土が互層をなして自然に堆積した状態である。27層中には、黒灰色砂が鉄分を多く含み、地山の床面と共に、所謂、カナクソ盤に変化していた。

なお、21層までが堆積した段階で、多くの川原石と共に土器が一括投棄されていた。

ところで、33号溝の強土は暗灰色砂質土で、31号土壇19層の暗灰褐色粘質土とは明かに異なるが、33号土壇34層の暗茶灰色砂質土とはさほどの差位はない。37号溝の埋土は、暗褐色砂質土で、33号溝・33号土壇34層と共に砂質土である。

また、33号溝の延長方向の31号土壇東内縁にビット様の掘り込みを検出したが、この掘り込みは33号溝から31号土壇への流入部とも考えられる。

加えて、33号溝は31・32号土壇北西部で共に接する。37号溝も、33号溝が31号土壇北東部で接するものと同様に、33号土壇北東部で接した可能性が強い。

さらに、37号溝の床面標高は、34号土壇付近で32.99m・中央部で32.89m・33号土壇付近で32.88mを測り、33号溝の床面標高は、31・32号土壇中間部で32.80m・31号土壇以西の土層断面部で32.75mを測る。

以上のことから、37・33号溝は同一のもので、東から西へと流れ、31～33号土壇と一連の遺構と考えられる。

なお、土壇の西側に近接する小ビット2個は、埋土・形状から木根痕と判断した。

32・33号土壇 (図版7-2・8-1・9, 第3図)

検出上面プランは、210×272cmの隅丸長方形を呈したが、約20cm下で一段深い掘り込みを検出したので、32・33号土壇の二者に一応区別した。

しかし、33号土壇東壁プランは32号床面で確認できたもので、8～20cm大の川原石群は、図版9-1に示すように32号土壇上面から床面、そして断面図に示すようにに33号土壇床面にかけて出土した。

以上のことから、200cm前後の隅丸方形プランの32号土壇を設けた後で、更に一段と深い216cmの隅丸方形プランの33号土壇を併設したものと判断される。

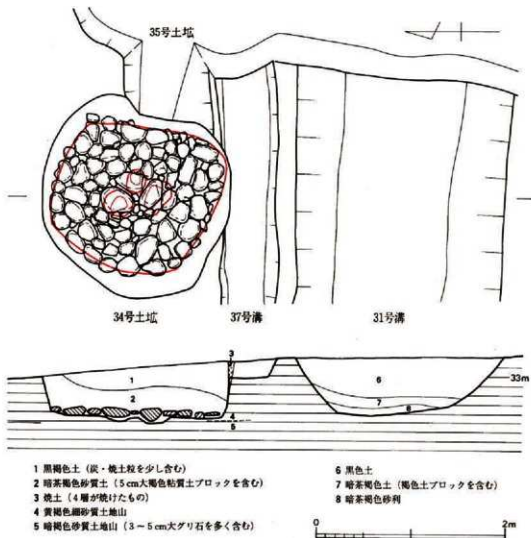
32号土壇の主軸はN-53.5°-E、検出上面から床面までの深さは25cmを測り、床面標高は32.74mである。

また、33号土壇の主軸はN-60°-E、検出上面から床面までの深さは46cmを測り、床面標高は32.55mである。

なお、31号土壇からも32・33号土壇同様の川原石が出土しているが、共に土壇西南半部から床面中央部にかけて認められた。

34・35号土壇 (図版7-1・10, 第4図)

34号土壇の検出上面プランは、200×2.05cmの隅丸方形を呈すが、東側の35号土壇とは上面幅104cm・床面幅36~54cmの溝様遺構で連続する。



第4図 34・35号土壇, 31・37号溝状遺構実測図

34号土塚の床面プランは、東・西壁下方向が35号土塚西壁方向とほぼ等しく、溝様遺構南・北壁方向と35号土塚北壁方向とほぼ等しい。

以上のことと、各遺構の埋土に差異が認められないことから、34・35号土塚と溝様遺構を一連のものとし、溝様遺構南・北壁下中央線を主軸として、N-83.5°-Eを測った。

34号土塚は、断面図に示すように、37号溝埋土を切る南壁部上位が加熱をうけ、赤褐色砂質焼土（因中アミ部）となり、北西壁部上位同様にはほぼ垂直な壁形状を残していた。

しかし、地山が細砂質土のため、北壁・南西壁部は崩落していた。

埋土の観察では、1層の黒褐色土中には炭・焼土粒が含まれていたが、2層には含まれず、2層の砂質土中には5cm大の粘質土ブロックが含まれていたことなどから、2層は人為的に埋めもどされ、1層は自然に堆積したものと判断した。

なお、1・2層からは焼骨等は確認できず、後述する床面の川原石の熟変は認めなかった。

また、床面からは10cm・20cm・30cm前後のほぼ3タイプの川原石が、床一面に出土した。

石群は、いずれも扁平で厚さ10cm前後のものを使用し、平坦な床面上に石上面のレベルを整えて、床周辺部にまで丁寧に敷きつめられていた。

敷石下からは、20-40cm大で深さ約10cmのピットが3個、ほぼ床面中央部で検出されたが、その上位にはそれぞれ30cm大の大きいタイプの石を使用している。

34号土塚の検出上面から床面までの深さは60cmを測り、床面標高は32.56mである。

また、溝様遺構の床面標高は、34号土塚と接する部分で32.68m・35号土塚と接する部分で32.65mを測り、35号土塚は中央部・東部共に32.65mを測る。

2. 溝状遺構

溝状遺構は、31-39号の9条が、いずれも溝状遺構（以下、溝と略す）間で著しく重複して検出され、また、近世墓でその大半が攪乱されていた。

また、前章の12月12日の調査日誌の項（本文4頁）で既述のように、32・34・38号溝の検出は、第3図の土層断面図の13層を除去後にしたもので、例えば32号溝の平面プランは32号古溝を図示したものである。

さらに、図版2-1に示すように、バイパス建設工事が第1地点のみを残すだけとなり、35号溝が工事で既に盛土されるなど、工期がせまるなどの事情で、35号溝はその一部のみの確認にとどまった。

以上のなかで、土層断面観察・調査時の所見、およびその平面プランの図示などから、各遺構間の切り合い関係による新・旧を古→新で示せば、以下のとおりである。

31号溝→37号溝→34号溝→38号溝→36号溝

31号溝→39号溝

32号溝→38号溝→36号溝

35号溝→36号溝

37号溝→39号溝

31号溝状遺構 (図版 8-1・10, 第3・5図)

第5図に示す土層断面部での検出プランは、上面幅177cm・床面幅118cm・深さ59cmを測り、床面中央部の標高は、39号溝近く32.66m・34号溝屈折部で32.60m・第3図土層断面部では32.47mで、東→西方向へ低くなる。

また、溝主軸は、南側壁下線(34号土壇付近～31号土壇付近)を考慮すれば、N-78.5°-Eを測る。

32号溝状遺構 (図版 7-2, 第3図)

第3図に示す土層断面部付近での復原プランは、32号新溝が上面幅180cm・床面幅92cm・深さ44cmを測り、床面中央部の標高は32.98mで、32号古溝が上面幅84cm・床面幅34cmを測り、床面中央部の標高は32.56mである。

36号溝と交差する付近の32号古溝の床中央部の標高は32.79m・南端部の調査区境界壁断面部では32.81mで、南端部から屈折部を経て西端部方向へと低くなる。

また、溝主軸は、北側壁下線と東側壁下線が直交することから、N-86.5°-Eを測る。

33・37号溝状遺構 (図版 7-2・10-1, 第3・5図)

33号溝の第3図に示す土層断面部付近での復原プランは、上面幅41cm・床面幅25cm・深さ29cmを測る。

また、溝主軸は、33号土壇主軸のN-60°-Eと同様に測られ、31号土壇プランの南西隅と北東隅を結ぶ線とも一致する。

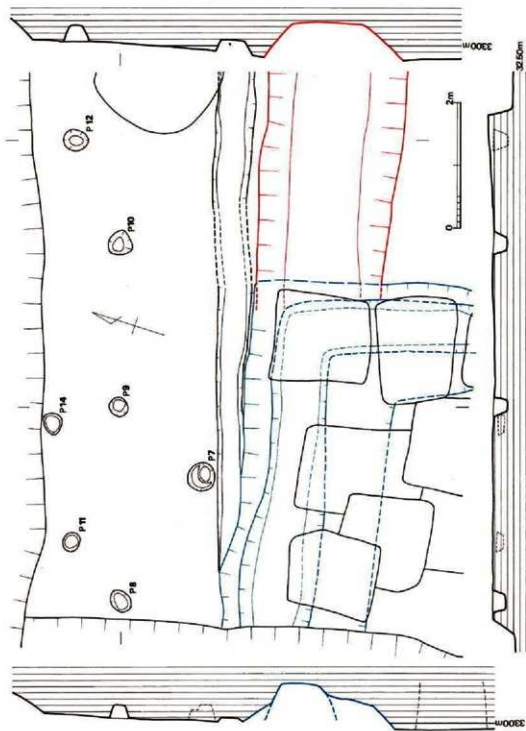
37号溝の第5図に示す断面部でのプランは、上面幅58cm・床面幅39cm・深さ17cmを測る。

また、溝主軸は、南側壁下線を考慮すれば、N-72.5°-Eを測る。

33・37号溝の床面の標高は、前節の31号土壇の項で既述したように、37号溝東端から33号溝西端方向へと低くなる。

34号溝状遺構 (図版 7-2・10-1, 第3・5図)

34号新溝の第3図に示す土層断面部付近での復原プランは、34号新溝の北壁が38号新溝北壁



第 5 図 31・34～37号溝状遺構・32号柱穴様小ピット列実測図 (1/60)

とほぼ重複するものなら、上面幅約260cm・深さ31cmを測り、床面中央部の標高は32.92mである。

34号中溝の第5図に示す土層断面部での復原プランは、上面幅約130cm・深さ61cmを測る。床面中央部の標高は、南端部の調査区境界壁断面部で32.81m・屈折部で32.67m・南端部で32.46mで、南端部から屈折部を経て西端部方向へと低くなる。

34号古溝の検出プランは、36号溝東側で、上面幅202cm・床面幅150cm・深さ59cmを測り、床面の標高は、南端部で32.94m・屈折部付近で32.75m・西端部で約32.60mで、同様に西端部方向へと低くなる。

また、34号中溝主軸は、南側壁下線を考慮すればN-78°-Eを測り、34号古溝主軸は同様にN-78.5°-Eを測る。

35号溝状遺構（図版7-2・10，第2・3図）

第2図に示すように、31号溝の検出上面プランの主軸は、大きく3方向に屈曲する。

まず、39号溝～33号土塚東北隅から2m以東間は、既述の37号溝主軸と同様にN-72.5°-Eを測る。

また、33号土塚東北隅から2m以東～31号土塚北西隅から2m以西間は、31号・34号古溝主軸と同様にN-78.5°-Eを測る。

さらに、31号土塚北西隅から2m以西～西端間は、32号古溝主軸と同様にN-86.5°-Eを測る。

36・38号溝状遺構（図版6・7-2，第3図）

36号古溝と38号新溝との重複部では、図版7-2で示すように、径60cm・長さ100cm前後の大きな石が出土した。

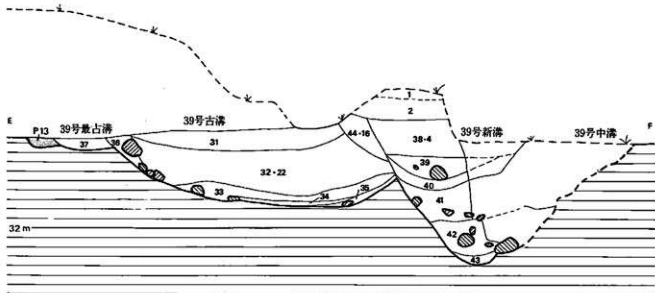
この石の最下標高は32.35mで、36号古溝の床面（標高32.40m）に5cmくらい込む状態で埋没しており、石除去後に38号古溝の埋土（30層）を掘り下げて、38号古溝の床面（同32.22m）を検出した。

また、38号古溝の4層（黒褐色砂質土）・5層（茶褐色砂質土）にはほぼ対応する土層は、調査区南境界壁面の土層観察でも認められ、上層が茶褐色砂質土の4層・下層が暗灰色砂であった。

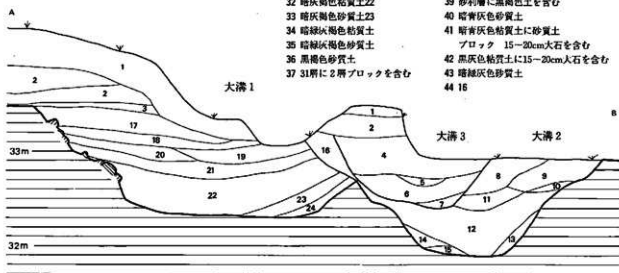
加えて、38号溝が36号溝を切ることは、前述の石除去後の土層断面でも追認できた。

以上のことから、38号溝は南北方向のみの溝で、38号溝よりも古い36号溝が南端部から屈折部を経て西端部に至るものと判断した。

したがって、38号新溝の南端での復原プランは、上面幅約250cm・深さ92cmを測り、床面



- | | |
|-----------------|------------------------|
| 31 黒褐色粘質土 | 38 黒暗緑灰色粘質土 4 |
| 32 暗灰褐色粘質土22 | 39 砂利層に黒褐色土を含む |
| 33 暗灰褐色砂質土23 | 40 暗青灰色砂質土 |
| 34 暗緑灰褐色粘質土 | 41 暗青灰色粘質土に砂質土 |
| 35 暗緑灰褐色砂質土 | アロク 15-20cm大石を含む |
| 36 黒褐色砂質土 | 42 暗灰色粘質土に15-20cm大石を含む |
| 37 31層に2層アロクを含む | 43 暗緑灰色砂質土 |
| | 44 16 |



- | | | |
|------------|------------|-------------|
| 1 黄土 | 9 淡灰褐色砂質土 | 17 暗灰褐色砂質土 |
| 2 耕作土 | 10 明灰褐色砂質土 | 18 淡灰褐色砂質土 |
| 3 粘土 | 11 暗灰褐色粘質土 | 19 17と同じ |
| 4 淡灰黄褐色砂質土 | 12 7と同じ | 20 淡灰黄褐色砂質土 |
| 5 暗黄褐色砂質土 | 13 11と同じ | 21 淡灰褐色砂質土 |
| 6 暗灰褐色砂質土 | 14 砂層 | 22 明灰褐色粘質土 |
| 7 明灰褐色粘質土 | 15 9と同じ | 23 暗灰褐色砂質土 |
| 8 淡灰褐色粘質土 | 16 明灰褐色粘質土 | 24 淡茶褐色砂質土 |



第 6 図 39号新(大溝3)・中(大溝2)・古(大溝1)溝状遺構断面図(1/40)

標高は32.53m、38号古溝の検出プランは、南端の上面幅100cm・南端の床面幅32cm（標高32.64m）を測るもので南流する。

なお、38号古溝主軸は、北半部が34号新溝と直交する $N-12^{\circ}-W$ であるが、南半部はほぼ32号古溝の南北方向主軸 $N-3.5^{\circ}-E$ に近いものであろう。

36号新溝の西端での復原プランは、上面幅128cm・下位床面幅19cmを測り、同床面の標高は32.70mである。

また、36号古溝の検出プランは、南端部の床面幅25cm（標高32.21m）・屈折部床面幅16cm（32.22m）・西端部床面幅28cm（同32.57m）を測り、床面は西端部から屈折部へと低くなり、南北方向の床面はほぼ水平である。

なお、36号古溝主軸は、南北方向では32号古溝と一致するが、東西方向では屈曲し、31・34号溝を斜断する。

39号溝状遺構（図版6・10～11・12-1，第2・6図）

39号溝は、図版10に示すように、1～8までのトレンチを発掘し、第2図の遺構配置図にはこの発掘区を———で、各トレンチ番号を1～8Tで示し、第6図のE-F土層断面図に示すように、31～42層の土層観察から、最古・古・中・新期の4期の溝に区別した。

また、この39号溝は第1次調査（「塚堂遺跡Ⅲ」）でもその一部が発掘されているので、第2図にはこの発掘区を———で示し、A-B土層断面図を第6図に再録した（C-D土層断面図は再録せず）。

なお、39号溝は「塚堂遺跡Ⅲ」では大溝と報告されているが、その対応関係は39号新溝が大溝3、39号中溝が大溝2、39号古溝が大溝1に一致する。

39号新溝のC-D・A-B・E-F各土層断面部での確認プランは、上面幅184cm・床面幅104cm・深さ88cmを測り、床面中央部の標高はそれぞれ32.32・32.40・32.41mでわずかにC-D断面部が低い、39号中・古・最古溝同様に北流していたものと判断してよい。

また、溝主軸は、C-D・E-F断面部の西側上面を考慮すれば、 $N-7^{\circ}-W$ を測る。

39号中溝の上述3断面部での確認プランは、上面幅314cm・床面幅83cm・深さ135cmを測り、床面中央部の標高はそれぞれ32.14・31.90・31.61mで、南→北方向に大きく低くなる。

また、溝主軸は、C-D・E-F断面部の西側上面を考慮すれば、 $N-7.5^{\circ}-W$ を測る。

39号古溝の上述3断面部での確認プランは、上面復原幅約400cm、床面幅はC-D断面部で170cm・A-B断面部で139cm、深さ117cmを測り、床面中央部の標高はそれぞれ32.38・32.30・32.23mで、南→北方向に低くなる。

また、溝主軸は、C-D・E-F断面部の西側上面を考慮すれば、 $N-5^{\circ}-W$ を測る。

39号最古溝は、本報告の第3次調査のE-F断面部で37層として初めて確認し、39号古溝西

側壁の葺石状川原石除去後に、1～8トレンチ間のはほぼすべてにわたってこの西側壁下プランを検出したものである。

39号最古溝の東側壁プランは、第2図の遺構配置図に示すように、A-B断面部の39号中溝東側壁から25cm以東で南端～北端の全域で検出されているプランと判断した。

以上のことから、39号最古溝の検出プランは、E-F断面部での上面幅約720cm（床面幅約640cm・深さ12cm・床面遺存部最下標高32.83m）を測り、中央部の3トレンチ北壁部での上面幅約770cm（床面幅約720cm・深さ21cm・床面最下標高33.05m）を測り、1トレンチ北壁部での上面幅約680cm（床面幅約610cm・深さ24cm・床面最下標高33.00m）を測り、溝中央部の大半を39号古・中・新溝に切られているが、同様に北流するものと判断した。

また、溝主軸は、西側プランを考慮すれば、 $N-8.5^{\circ}-W$ を測る。

3. 柱穴様小ピット列

既述のように、第3図の土層断面図に示した13層の遺物包含層を除去した後で、第2図の遺構配置図に示した計16個（P1～P16）の柱穴様小ピット（以下、Pと略）を検出した。

そのなかで、調査区の南側境界壁のP6は、上記の13層下面で出土したことを確認し、埋土は他のP同様の暗茶褐色砂質土であった。

31号柱穴様小ピット列（図版6，第7図）

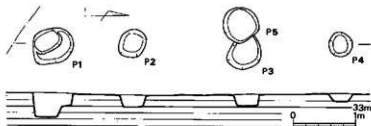
調査区南西端部の34号溝と39号溝間で検出した。

P2とP3の各中心を通る中軸方向は、 $N-0.5^{\circ}-W$ を計測し、P3よりP5が新しい。

P1～P2間は135cm、P2～P3間は180cm、P3～P4間は151cmを測る。

32号柱穴様小ピット列（図版6，第5図）

調査区北端部の37号溝と35号溝間で検出した。



第7図 31号柱穴様小ピット列実測図（1/60）

P 8 と P 10 の各中心を通る中軸方向は、N-72°-E を計測し、37号溝主軸N-72.5°-E とほとんど等しい。

P 8 - P 9 間は309cm, P 9 - P 10間は262cmを測る。

以上の他に、第5図のP11とP12と、第6図の39号溝E-F断面図に示したP13の中軸方向もN-72°-Eを測り、P13が39号最古溝より古い。

また、32号溝の南端～西側端間でP7、同溝北壁に接してP8を検出した。

第3節 出土遺物

1. 土坑出土の遺物

31号土坑出土遺物（図版20～22，第8図，表2）

上層（19層）で図示できるのは土師器小皿11（器周残1/2）のみで、他に小皿・杯が数十片あるが、計測できるものは数片で、いずれも19層の堆積時に青磁器片（図版22-1）と共に流入したものであろう。

中層（20層）では、図示した1～10・12～20以外にも多数の土師器小皿・杯が既述の石群と共に投棄された状態で出土した。

下層（26・27層）からは土師器小皿・杯の破片が数片出土したのみで、計測できるものはない。

小皿（5・7）1・6・11のように器壁が厚い例と、5・7のように器壁が薄い例の二者がある。

前者は、器内底部がナデ・屈折部～器外底部がヨコナデ・器外底部が糸切りのままである。

後者は、9では器内底部～器外底部がヨコナデ・器外底部が糸切りのままであるが、5では前者同様に器内底部にナデを加える。

胎土は、精製されたもので、微砂を含む例が多いが、3は0.5m大の細砂を多く含む。

焼成は、普通で淡褐色を呈する例が多いが、焼成がやや悪くて淡桃褐色を呈する例がある。

杯（12-17）13・15のように底部が糸切りのままの例と、12・14のように糸切り底に板状圧痕を認める例の二者がある。

前者は、器内底部～器外底部がヨコナデのままで、後者は、内底部にナデをわずかに加える。

胎土は、精製されたもので、微砂を含み、0.5～1mmの細砂も若干含む例が多いが、1.5mm大の砂をやや多く含む例もある。

焼成は、普通で、淡褐色を呈する例が多く、器外底部が淡褐色を呈する例も若干ある。

片口（18・19）18は、上層出土の瓦質のもので、器内底部下半は使用痕が顕著で、同上半部に

横方向ハケ目が残る。口縁部はヨコナアが丁家で、器外体部上半部はハケ目のままで、同下半部はナアを施すが凹凸が顕著である。

器周残1/4で片口部を欠損し、口径約29.8cmで、底径・器高共に11cm前後を測る。

胎土は、精製されたもので、細砂をあまり含まない。

焼成は、普通で、器内は暗灰色～淡灰色・器内は淡灰色・器外は灰色～淡灰褐色を呈す。

19は、中層出土の土師質のもので、器内はハケ目を遺すが使用による磨滅が顕著である。器外体部はナアを施すが凹凸を残し、同底部はナアが丁家で、平坦である。

胎土は、微細砂を多く含み、3mm大の砂もわずかに含む。

焼成は、良好で、器内は暗灰色で、器内・外は灰褐色を呈す。

白磁器 20は中層出土で、器周残1/4弱で口径8.0cmを測り、遺存部全面に釉を施

し、文様は認めない。直線的に外傾する体部から、口縁部がわずかに外湾し、口縁端部は丸味を有して屈曲する。器外は、口縁部直下～体部にヘラ削りを施す。

胎土は緑味灰色を呈し、釉は薄手で灰味黄緑色で、焼成は悪い。

図版22-1は上層出土の体部下半の小破片で、遺存部全面に釉を施し、器外に削り出しの蓮弁文を認める。

胎土は青味灰色を呈し、釉は薄手の灰味黄緑色で、焼成は普通である。

32・33号土坑出土土器 (図版23, 第9図, 表3)

上層 (34層) では、図示できた1～3・5も含めて、いずれも小破片のみで、破片数も少ない。

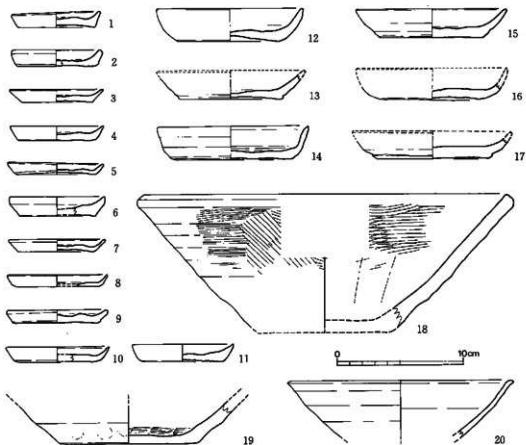
下層 (36層) では、図示できた4以外にほとんど出土せず、細片のみである。

表2 31号土坑出土土器計測表

挿入番号	番号	口径	底径	器高	備考
		7.0	5.6	1.2	上層
		7.0	6.4	1.4	◇
第8図	1	7.0	6.2	1.2	下層
	2	7.3	6.2	1.3	◇
	3	7.4	5.7	1.1	◇
	4	7.4	6.2	1.2	◇
	5	7.6	6.2	0.9	◇
	6	7.6	6.1	1.6	◇
	7	7.7	5.9	1.0	◇
	8	8.0	6.4	1.0	◇
	9	8.0	7.0	1.0	◇
	10	8.2	6.1	1.3	◇
	11	8.0	6.1	1.4	上層
小皿	平均	7.2	6.2	1.2	
第8図	12	11.6	7.9	2.6	中層
	13	(11.9)	8.4	(2.3)	◇
	14	12.0	9.5	2.6	◇
	15	12.0	8.5	2.3	◇
	16	(12.0)	8.3	(2.6)	◇
	17	(12.7)	9.5	(2.2)	◇
杯	平均	11.9	8.7	2.5	中層

表3 32・33号土坑出土土器計測表

挿入番号	番号	口径	底径	器高	備考
第9図	1	7.5	6.1	0.9	上層
	2	(8.1)	5.9	(1.0)	◇
	3	8.2	6.7	1.0	◇
小皿	平均	7.9	6.2	1.0	上層



第 8 図 31号土埴出土土器実測図 (1/3)

小皿 (1~3) 2 は、器内底部に丁寧なナデを加え、糸切り底に板状圧痕を認める。

1・3 は、同様にナデを加えるが、1 (器周残1/2強)・2 (同1/4) 共に遺存部での板状圧痕は不明である。

杯 (4) 4 は、口径12.7cm・底径7.6cm・器高3.3cmを測り、器内底部にナデを加え、磨滅が著しいが、糸切り底である。

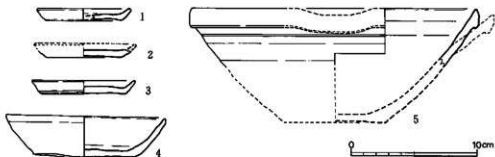
片口 (5) 須恵質のもので、口縁部のヨコナデも丁寧である。

小破片であるが、口径約23.0cmで、底径8cm・器高9cm前後を測る。

胎土は、微砂を多く含み、細砂も若干含む。

焼成は、良好で口縁部に自然釉を認め、器内・肉・外共に青灰色を呈す。

34・35号土埴出土遺物 (図版23, 第10図)



第 9 図 32・33号土塚出土土器実測図 (1/3)

上層（1層）の自然流入土では、1（器周残1/4）・3（同1/8弱）、下層（2層）の人為的に埋めもどされた土では、3（同1/2）のいずれも破片が出土した以外に、遺物の出土はほとんどない。

杯（1）器内の磨減が著しく、調整は不明瞭であるが、糸切り底で、底径は8.7cmを測る。

鉢（3）器内外共に、横方向ハケ目を残し、器内に煤が付着する。口径約32.0cm前後を測り、器形は洗面器状を呈する平底の鉢である。

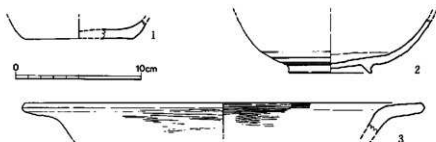
胎土は、細砂や2～5mm大の砂を多く含む。

焼成は、良好で、器内外共に暗茶褐色を呈す。

瓦器碗（2）器内は、体部に丁寧なナデを施すが、底部との屈曲部にわずかな段差が生じている。この段差部から底部にかけて、不定方向のナデを加えるが、やや雑なため、段差は一周している。器外は、体部がヨコナデで、高台部のナデはやや雑である。高台径は、6.6cmを測る。

胎土は、精製されているが、1～2mm大の砂をわずかに含む。

焼成は、普通で器内外共に淡灰色を呈し、器外体部下位～高台外面の一部に煤が付着する。



第 10 図 34号土塚出土土器実測図 (1/3)

2. 溝状遺構出土の遺物

31号溝状遺構出土遺物 (第11図)

弥生土器・土師器の細片が若干出土したなかで、図示できるのは土師器の7のみである。

杯 (7) 器周残1/4弱の破片で、器内底部がナデ・屈折部-器外体部がヨコナデの糸切り底で、残存部に板状圧痕は認めない。口径13.5cm・底径9.8cm・器高2.9cmを測る。

32号溝状遺構出土遺物 (図版22-2・3)

32号古溝では、若干の土器が出土したが、いずれも小破片で、土師器類で図示できるものはなく、青磁器も図版に示すような体部小破片のみである。

小皿 器周残1/4弱と同3/8の底部破片の観察では、共に内底部にナデを加え、糸切り底のままである。

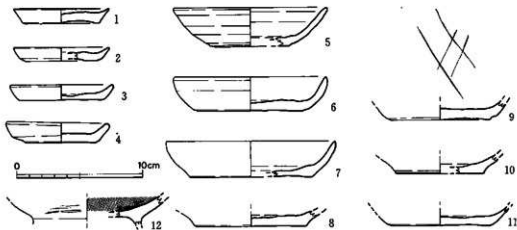
杯 器周残1/4弱-1/8までの底部破片4例の観察では、糸切り底のままである。

鉢 2例の観察では、1例が高台部も遺存し、他の1例は高台を欠損するが、器内底部に明確なヘラ研ぎを施す内面黒色土器である。

青磁器碗 2小破片が出土し、図版22-2の観察では、器外面に蓮弁文のシノギの一部を認める。

胎土は淡褐色を呈し、釉は薄手の黄味緑色で、焼成も悪く貫入が著しい。

同3の観察では、器外面に蓮弁文の一部を認め、胎土は白味灰色を呈し、釉は薄手の灰味緑色で、焼成は普通である。



第11図 31 (7)、33 (5)、34 (1・4・12)、36 (2・3・8・10)、39 (6・9・11)号溝状遺構出土土器実測図 (1/3)

33・37号溝状遺構出土遺物 (図版22-9, 第11図)

33号溝からわずかの破片が出土したが、図示できるのは土師器杯5 (器周残1/8) のみで、図版22-9に示した青磁器と共に、31号土壇の東側で出土した。

杯(5)体部は、器内外共に丁寧なヨコナデで、底部は一部のみが残存するだけで糸切り・ヘラ切り底との判断はできない。

青磁器碗 図版22-9に示す体部の小破片で、器内面に飛雲文の一部を認める。

胎土は淡灰色を呈し、釉は薄手の青味緑色で、焼成はやや悪く貫入が著しい。

34号溝状遺構出土遺物 (図版22・23, 第11図)

34号中・古溝は、南北方向部がほとんど近世墓に切られ、東西方向部も36号溝以西の大半が38号溝に切られているため、出土遺物は少ない。

また、発掘に際して、中・古溝を区別せずに掘り下げたため、遺物の出土層位は不明である。

なお、図版23, 第12図に示した土器は、34号中・古溝を切った近世墓出土の埴輪陶器である。

小皿(1・4)1は、器周残3/8で、東西方向部の36号溝以東で出土した。器内底部にナデを加え、屈折部一器外体部がヨコナデで、糸切り底に板状圧痕を認める。口径7.6cm・底径5.9cm・器高1.1cmを測る。

4は、器周残5/8で、南北方向部の北半で出土し、1同様の技法で、糸切り底にわずかな板状圧痕を認める。口径8.2cm・底径5.8cm・器高2.2cmを測る。

碗(12)小皿1付近で出土し、器内底部のヘラ研きは体部外面と共に丁寧で、器内面内黒土器である。

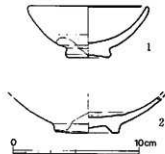
青磁器碗 図版22-8は、南北方向部の北端で出土した体部の小破片で、器内面にヘラおよび櫛状工具による施文を認める。器外面は無文である。

35号溝状遺構出土遺物

第3図の土層断面図に示すように、確認プラン上面から30cm前後まで掘り下げたが、遺物の出土はない。

36号溝状遺構出土遺物 (図版22・23, 第11図)

36号新・古溝共に、遺物の出土はわずかで、図示できた破片4例の出土位置は、2・8・10が他の溝と切り合いのない34号溝東西方向部以北の36号溝出土である。



第12図 34号溝状遺構内近世墓出土土器実測図(1/3)

小皿(2・3) 2・3共に、器内面の磨減が著しいが、糸切りである。2は、口径7.6cm・底径5.6cm・器高1.1cmを測り、3は、同様に8.2cm・6.8cm・1.2cmを測る。

杯(8・10) 8は、器内底部にナデを加え、器周残1/4強で糸切り底であるが、板状圧痕は認めない。

青磁器杯 図版22-2の体部小破片で、器外に蓮弁文を認め、器内は無文である。

胎土は淡褐色を呈し、釉は非常に薄手の黄味緑色で、焼成は悪く貫入が著しい。

38号溝状遺構出土遺物

38号古・新溝共に、遺物は土器の小破片がわずかで、図示できるものはない。

39号溝状遺構出土遺物 (図版22, 第11図)

既述の1~8トレンチのなかで、1~4トレンチ間は第1次調査で発掘されており、第3次調査では5・6・8トレンチで39号古・最古溝を完掘し、7トレンチで39号新・中溝の一部を掘り下げただけで、遺物の出土量は多くない。

杯(6・9・10) 6・9は6トレンチ、11は5トレンチで、共に39号古溝から出土した。6は、

器内底部がナデ、屈折部-器外体部がヨコナデで、9・11同様の糸切り底に板状圧痕を認める。口径12.3cm・底径8.4cm・器高2.7cmを測る。

青磁器椀 (図版22-5~6・10~12) 5・6・10・11は6トレンチの39号古溝下層、7は5トレンチの同古溝上層、12は7トレンチの同新溝から出土した。

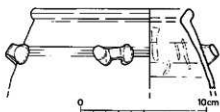
5・6は、共に器外に蓮弁文を有すがシノギがない。

7は、体部下位の器内に草花文の片彫りの一部を認め、11も、内底見込みと体部下位にその一部を認める。

10は、体部内面を分割する2本の沈線を認める口縁部片であるが、口縁は輪花部ではない。

12は、器外体部に細い蓮弁を削り出すが、釉が厚手なためにシノギ部分しか見えず、釉が薄青緑色を呈すなどの特徴から、たたみつきの部分がやや尖り釉のかからない薄い高台部を欠失したものである。

なお、各遺構出土の青磁器は、いずれも龍泉窯系のものばかりであったが、表探資料として図版22-13に示した樹歯文を認める同窯系のものもある。第13図の土器には、耳部に2条の沈線がめぐり、短口縁の内面に目跡を残す。釉は著しく薄手で、黄味緑灰色を呈す。



第13図 表探土器実測図 (1/3)

第3章 E地区第3～6地点の調査

第1節 はじめに

第2章第1節で既述したように、第2地点の1号掘立柱建物と1号溝・2号溝・3号溝は、本書では以下、それぞれ21号掘立柱建物と21号溝・22号溝・33号溝と記す。

第2節 出土遺構

第3～6地点では、住居跡が2軒、掘立柱建物が1棟、土壇が7基、溝状遺構が19条、ピット列群が7箇所それぞれ出土したが、瓦粘土探掘坑による攪乱や削平が著しかった。

1. 住居跡

住居跡は、21・22号の2軒が出土した。

以下、住居跡の説明については、『塚堂遺跡Ⅰ』・『塚堂遺跡Ⅱ』・『塚堂遺跡Ⅳ』と同様に、第14図の模式図に示す統一名称・番号を使用し、住居の計測方法も表4の模式計測表に従う。

主柱穴 P11から付す。4個の主柱穴を配すと考えられるが、P12の位置で柱穴が検出されなかった例でも、P11～14を使用し、計測表にP12を欠番と明記する。

なお、P11～14の位置で柱穴が検出されず、P21・22の位置でそれぞれ1個を検出した例は、P21・22の番号を使用せずに、P11・12を付して、主柱穴2個とする。

また、P11～14・P12～13間は、P11～12・P14～P13間と等しいか・小さいものとする。

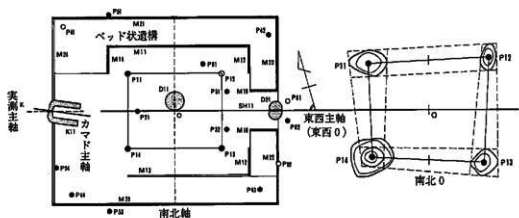
主軸柱穴 P21から付す。主柱穴間のほぼ中央に位置する柱穴。

なお、P21個の主柱穴列とは反対の主柱穴列側に、当初からP22を設けない例も多く、計測表にはP22を欠番と明記しない。

主軸間柱穴 P31から付す。主柱穴からやや離れ、P31～32間の方が、P11～14・P12～13間よりも小さい柱穴。

なお、主柱穴から大きく離れ、あるいはP11～14・P12～13間よりも柱穴間距離が大きい例は、他の機能を考慮して、後述の施設柱とする。

対角柱穴 P41から付す。主柱穴から離れ、主柱穴あるいは壁隅を対角線状に結んだ線上・



第 14 図 住居跡模式図と柱穴間距離計測例図

表 4 住居跡模式計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸間主柱間	施設柱間	主軸柱間	番号	短径×長径	深さ
東西	P ₃₂ ・P ₄₁	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₂₁ -P ₁₂	P ₀₁ -東西O	P ₂₁ -南北O	P ₁₁		
N-75°-W	P ₃₃ ・M ₂₃	?	?	?	?		P ₁₂		
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₁ -P ₁₃	P ₂₁ -P ₁₃	P ₀₁ -東西O	主軸間柱間	P ₁₃		
		?				P ₂₁ -P ₂₂	P ₁₄		
	平均						平均		

近くに位置する柱穴。

なお、P₄₁・43などの位置で検出されなかった例でも、P₄₁~44 (P₄₁~48の例もある) を使用し、計測表にはP₄₁・44を欠番と明記する。

壁柱穴 P₅₁から付す。住居壁に位置する柱穴。壁に近い住居内外の柱穴も含める。

その他の柱穴 P₈₁から付す。上記以外の柱穴。

住居中心 O P₁₁-14・P₁₂-13間および、P₁₁-12・P₁₄-11間の中心を結ぶ中心。

主軸 O P₁₁-14・P₁₂-13間中心を通る軸。なお、主柱穴 2 個例では、P₁₁-12を通る軸。中央土壇 D₁₁から付す。住居中央部付近に位置する土壇。なお、攪乱部・未調査区に配されたことが明らかであるが、検出できなかった例では、計測表に欠番と明記する。

壁土壇 D₂₁から付す。住居壁に位置する土壇。なお、壁に近い住居内外の土壇も含める。

溝状遺構 M₁₁から、あるいはM₂₁から付す。M₁₁-14は、壁から大きく離れ、床面の使用機能を、中央部と周辺部に区画する例で、後述の方形(半円形)区画外縁に沿って連続する例も多いが、必ずしも 4 条が当初から設けられたわけではない。

また、M₁₅からは、2 条が対で、互いに平行・直交方向に配され、最も近い壁と直交する例。

なお、M15からは張り床除去後に確認できる例も多く、張り床上面で検出できなかった例もあると考えられ、1条のみしか確認されなかった例でも、M15・16を使用し、計測表に1条を欠番として明記する。

M15～24は、壁に沿う例。所謂、周溝として各壁間が連続する例も多い。

方形（半円形）区画 11から付す。区画形状が方形を呈する例ではS、半円形を呈する例ではCを、番号の前に加える。

M15～20で他の床面と区別され、壁に接した区画で、その中央部あるいは近接して、D21を設ける例が多い。（A地区6号住居は、M17・D21・C11を設け、A地区22号住居は、M15・16・D21・S11を設ける。D地区9号住居は、M15・S11A・Bが配されている）。

なお、所謂、ベッド状遺構が、壁の中途までしか設けられない例では、この設けられない低い床面も、中央部の低い床面と区別して、この例に加える（A地区11号住居は、ベッド状遺構・D21・S11を配し、D地区9号住居は、ベッド状遺構・S12を配す）。

また、区画のみを別途の張り床とするD地区7号A（新）住居例や、区画部を地山削り残しとする例もある（B地区2号住居は、S11のみを設ける）。

21号住居跡（図版14、第15図）

第3地点の中央部やや北寄りで見出した。

この住居は、南壁や柱穴などの検出状態から、重複して建て替えられたものと判断し、新期のものを21号A住居（以下、21A住と略）、古期のものを21号B住居（同、21B住と略）と区別して説明する。

21号A（新）住居跡（表5）

主柱穴配置は、21B住の2個から4個へと増加し、主柱穴も西壁側のBP21から南壁側のAP21へと移動させるなど、北側への床面の拡張は、上部構造の著しい変化を伴っている。

なお、AP13とBP81の新・古関係は埋土の差位で確認できた。

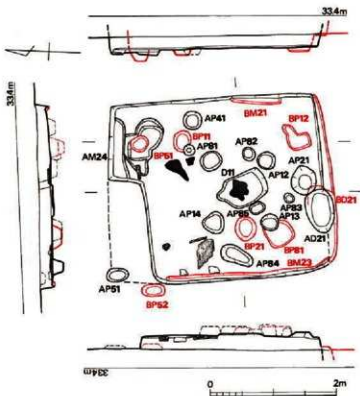
主柱穴は、北壁のベッド状遺構を避けて南壁側に、また、21B住のBD21とほぼ重複して付設した南壁土壇AD21との重複を避けて、南北0直下からやや東側にAD21が配されている。

対角柱穴は、床面が拡張された北東部にAP41が検出されたが、AP42～44は配されなかったものか。

壁柱穴配置は、北壁と西壁の延長上にAP51が検出されたことから、北壁部を拡張し、ベッド状遺構を付設したもので、ベッド状遺構部の壁面は削平されたものと判断した。

中央土壇は、4主柱穴間内に配され、床面に接して、中央部に焼土が出土した。

壁土壇は、南北0に西接して南壁側に配され、AD21の東半部が不整形を呈すことから、ほぼBD21と重複して配されたものと判断した。



第 15 図 21号A (新)・B (古) 住居跡実測図 (1/60)

ベッド状遺構は、既述のように、北側拡張部を削り出して付設し、上部構造の変化を伴う建て替えの要因となったものと思われる。

溝状遺構は、北壁拡張部で幅広のAM24が検出され、東・西壁の溝状遺構とは埋土・断面形に差味が認められることなどから、後者は21B住に伴うものと判断した。

なお、住居北半部のベッド状遺構近くでのみ、炭化材・ワラ状炭化物・焼土が出土した。

21号B (古) 住居跡 (表6)

床面積は、8.2m²と著しく小さいが、以下に説明するように、各柱穴・溝状遺構・土垣はいずれも整然と配されている。

主柱穴は、床面中央部東壁側のみBP11・BP12が配され、西壁側にはBP13・BP14を配さずに主軸柱穴BP21のみを設ける。このBP21の中心とBP11-BP12の中心を結ぶ東西主軸0に南接して、東壁側にBM21を付設する

また、同様に南北軸0に西壁して、南壁側に壁土垣BD21を配す。

壁柱穴は、BD21とは反対側の北壁にのみBP51・BP52を配し、BP51はBP11・BP12柱列方向に位置する。

なお、BP11・BP81はAP81・AP13から共に切られていることが確認され、BP51は不整形土域下で検出した。

22号住居跡 (図版15-1, 第16図)

第3地点中央部で、21号住居南壁から8m南方で検出した。

表5 21号A(新)住居跡(南北軸)計測表

主軸方向	欠番	東主柱間	南北主柱間	主軸柱間	対角柱間	番号	短径×長径	深さ
南北 N-2.5°-E	AP ₁₂ -AP ₁₄	AR ₁₁ -AP ₁₄	AR ₁₁ -AP ₁₃	AP ₁₁ -東西	AP ₁₁ -東西	AP ₁₁	0.30×0.33	0.10
	AM ₁₂ -AM ₁₃	0.98	0.87	1.02	0.71	AP ₁₂	0.28×0.29	0.12
		AR ₁₂ -AP ₁₃	AR ₁₁ -AP ₁₃		AP ₁₁ -南北	AP ₁₃	0.26×0.28	0.17
		0.98	0.90		1.15	AP ₁₄	0.34×0.35	0.16
	平均	0.98	0.89			平均	0.30×0.31	0.14
						AP ₂₁	0.39×0.46	0.09
						AP ₄₁	0.29×0.29	0.09
						AP ₅₁	0.24×0.34	0.10
						AP ₈₁	0.17×0.17	0.18
						AP ₈₂	0.19×0.21	0.10
						AP ₈₃	0.15×0.17	0.13
						AP ₈₄	0.24×0.53	0.17
						AP ₈₅	0.18×0.24	0.11
						平均	0.19×0.27	0.14
						AD ₁₁	0.44×(0.69)	0.40
						AD ₂₁	0.51×(0.71)	

計測部	面積内訳
全床面積(復原)	$(1^2 \times 6) + (0.2^2 \times 63) + (0.05^2 \times 430) \times (0.05^2 \times 238) \div 2 = 9.4925$
AP ₁₁ ~AP ₁₄ 内	$(1.35 \times 0.63) \div 2 + (1.35 \times 0.64) \div 2 = 0.87075$
中央AD ₁₁	$(0.2^2 \times 3) + (0.05^2 \times 63) + (0.05^2 \times 50) \div 2 = 0.34$
南壁AD ₁₁	$(0.2^2 \times 2) + (0.05^2 \times 48) + (0.05^2 \times 23) \div 2 = 0.22875$
北へ、F状遺構(復原)	$(0.2^2 \times 14) + (0.05^2 \times 161) + (0.05^2 \times 90) \div 2 = 1.075$

表6 21号B(古)住居跡(東西軸)計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	測点間	測点間	測点間	番号	短径×長径	深さ
東西 N-84.0°-E	BM ₁₂ -BM ₁₁	BR ₁₁ -BR ₁₂	BR ₁₁ -東西	BP ₁₁ -南壁	BP ₁₁ -東壁	BP ₁₁	0.24×0.33	0.11
			1.86	1.62	1.45	0.66	BP ₁₂	0.24×0.38
			BR ₁₂ -東西	BP ₁₁ -北壁	BP ₁₂ -東壁	平均	0.24×0.36	0.09
			1.52	1.54	0.68	BP ₂₁	0.34×0.38	0.13
		平均	1.57	1.50	BP ₃₁ -東壁	BP ₅₁	0.25×0.29	0.18
					0.63	BP ₁₂	0.20×0.36	0.07
				平均	0.66	BP ₈₁	0.43×	0.16
						BD ₁₁	×	
						BD ₂₁	×	

計測部	面積内訳
全床面積(復原)	$(1^2 \times 4) + (0.2^2 \times 76) + (0.05^2 \times 361) + (0.05^2 \times 206) \div 2 = 8.2$
BR ₁₁ ~BR ₁₂ -BR ₁₁ 内	$(1.86 \times 1.39) \div 2 = 1.2927$
中央BD ₁₁	
南壁BD ₁₁	

住居のプランは、北壁の一部が遺存するだけで、その他の壁・床面はすべて瓦粘土探掘坑で消滅し、住居内外の柱穴が若干検出されただけである。

主柱穴配置は、P11・12の2個が探掘坑で消滅したものである。

ところで、後述するP53・94中心を通る線を住居南北中軸0とすると、北壁上面検出プランは、中心0から半径R=1.98mの円形プランに一致する。

上記のことと、後述する壁柱穴その他の柱穴配置から、P11・12の位置は、0から半径1.98m×1/3=0.66mの円周上に位置し、南北中軸0に対峙するように配されたものと判断してよい。

主軸間柱は、同様に0から半径r=1.98m×2/3=1.32mの円周上で、東西主軸に対峙するように西側にP31・32が、東側にP33・34が配されたものと判断してよいだろう。

壁柱穴は、P51・53・56の3個を検出したが、P51-P53間に東西主軸0を介してP56と対峙するP52が、また、南北0を介してP52・56にそれぞれ対峙するP54・55が配されたものと思われる。

なお、P51は主軸柱P21を加味した柱と考えられ、P57をP54-P55間の東西主軸上に配して主軸柱P22の機能をもたせた可能性が高い。

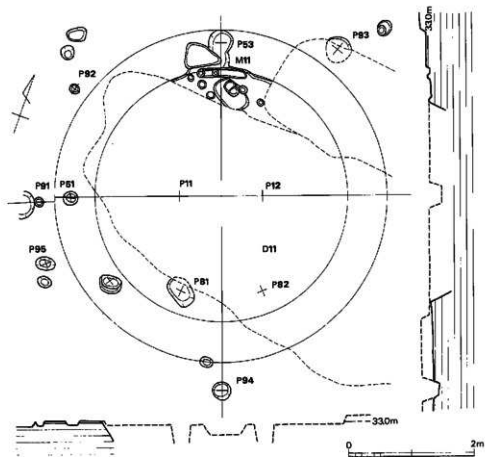
その他の柱穴のなかで、P81は、P81-南北0間が1.32mを測り、主軸柱-南北0間の1.30mとほとんど一致することから、南北0を介してP81に対峙するP82が東側に配されたものと判

表7 22号住居跡（東西軸）計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	主柱-O間	壁-O間	柱-O間	番号	短径×長径	深さ	
東西 N-70.5°-E	P ₁₁ ・P ₁₂ ・P ₃₁ ・P ₃₂ ・P ₃₃ ・P ₃₄ P ₅₁ ・P ₅₂ ・P ₅₃ ・D ₁	P ₁₁ -P ₁₂	P ₁₁ -O	北壁-O	P ₃₁ -O	P ₁₁			
		(1.32)	(0.66)	1.98	2.89	P ₁₂			
		P ₃₁ -南北0	P ₁₂ -O	壁柱-O間	P ₃₁ -O	P ₅₁	0.22×0.23	32.98	
		1.30	(0.66)		2.87	P ₅₂	0.40×(0.40)	33.04	
				P ₅₁ -O	P ₅₃ -O	P ₅₆	0.27×0.36	32.78	
				2.38	2.98	平均	0.30×0.4	32.93	
				P ₅₃ -O	P ₅₅ -O	P ₈₁	0.33×0.50	32.82	
				2.43	3.09	P ₂₁	0.14×0.15	32.97	
				P ₅₅ -O	P ₅₅ -O	P ₂₂	0.14×0.15	33.02	
				2.23	2.98	P ₃₁	0.42×(0.42)	33.03	
				平均	2.35	2.96	P ₃₃	0.28×0.29	32.85
						P ₅₅	0.22×0.31	32.87	
						平均	0.24×0.23	32.95	

計測部	面積内訳(復原)
全床面積	$\pi r^2 = 3.14 \times 1.98 \times 1.98 = 12.3101$

※ 深さは標高



第 16 図 22号住居跡実測図 (1/60)

断してよいだろう。

住居壁外のP91～95のなかで、P91は東西主軸0に北接し、P94は南北0下に位置する。

また、P95はP51～P56間・P93はP53～P57間に位置する。

上記のことから、東西主軸0下に1個、P57～P94間にも1個が配されていた可能性が高い。

中央土壇D11は、探掘坑で消滅しているが、住居中心0に配されていたものと判断してよい。

溝状遺構は、M11が南北主軸下の北壁で検出されたが、この部分の北壁にわずかの張り出しが認められることから、P53も含めてP53周辺部を北壁外の方形区画SH11とすべきと思われる。

2. 掘立柱建物

掘立柱建物は、E地区第3地点の北西隅部で、21号建物を1棟検出したのみである。

この建物は、1次調査では第1地点の北東隅部にあたり、調査区内の西側柱列のみの検出に
とどめ「塚堂遺跡Ⅲ」でP₁・P₂・P₃と報告され、1間×2間の建物が想定されていた。

しかし、2次調査の結果、2間×2間の建物であることが確認されたので、第17図に示すよ
うに、同書報告のP₁をP₆、P₂をP₅、P₃をP₄として説明する。

21号掘立柱建物（図版15-2、第17図）

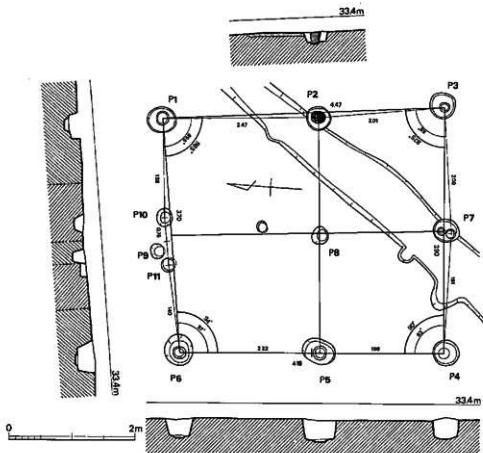
建物は、P₂とP₇が共に、24号溝状遺構を切るので、21号建物の方が新しく、P₂では柱
痕を確認した。

桁行柱間では、P₁-P₂が2.47m・P₉-P₈が2.60m・P₆-P₅が2.22mを計り、平
均は2.43mであるが、P₂-P₃が2.01m・P₈-P₇が2.06m・P₅-P₄が1.96mを測り、
平均は1.67mとなり、建物の北半部の桁行柱間が平均で、0.76m大きい。

この桁行柱間の大きい北側柱列P₁-P₆間にもみP₉と共にP₁₀・P₁₁が検出され、南側

表8 21号掘立柱建物（南北軸）計測表

主軸方向	欠番	桁行	梁行	桁行柱間	梁行柱間	番号	短径×長径	深さ	柱 六 段 掘 り	
南北 N-S E-W		P ₁ -P ₃ 4.47	P ₁ -P ₆ 3.72	P ₁ -P ₂ 2.47	P ₁ -P ₉ 2.11	P ₁	0.39×0.46	0.18		
		P ₉ -P ₇ 4.66	P ₂ -P ₅ 3.74	P ₂ -P ₃ 2.01	P ₉ -P ₆ 1.64	P ₂	0.37×0.39	0.17		
		P ₆ -P ₄ 4.18	P ₃ -P ₄ 3.90	P ₈ -P ₆ 2.60	P ₂ -P ₉ 1.88	P ₃	0.39×0.40	0.11		
		平均	4.44	3.79	P ₈ -P ₇	P ₈ -P ₅	P ₄	0.40×0.42		0.29
		柱間A		2.06	1.86	P ₅	0.40×0.53	0.33		
		P ₁₁ -P ₆ 1.40		P ₆ -P ₅ 2.22	P ₃ -P ₇ 2.00	P ₆	0.44×0.50	0.27		
		平均	1.49	平均	2.22	1.91	P ₇	0.37×0.41		0.14
						P ₈	0.27×0.27	0.21		
						P ₉	0.21×0.23	0.19		
						平均	0.36×0.40	0.21		
					P ₁	0.16×0.18	0.23			
					P ₃	0.15×0.16	0.17			
					P ₄	×	0.34			
					P ₅	0.21×0.21	0.36			
					P ₆	0.20×0.20	0.30			
					P ₇	0.14×0.16	0.33			
					平均	0.17×0.18	0.35			
					P ₂	0.20×0.22	0.20	柱痕		



第 17 図 21号掘立柱建物実測図 (1/60)

柱列 P 3 - P 4 間では P 7 が検出されただけであるが、P 10 - P 11 は 0.76m を測り、上述の平均と一致する。

計画値は異なるが、同様の柱穴配置をとる総柱建物に、D地区 3号建物がある。
(「新石器時代」)

3. 土城

土城は、第 3 地点で 5 基、第 4 地点で 2 基の計 7 基を以下に説明する。

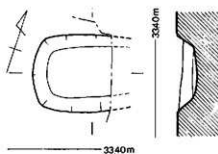
なお、第 3 地点の 25 号土城周辺や、第 5 地点などにも、やや不整形な土城を検出したが、深さは 5 cm 前後のものが多い。

21号土壇 (図版15-2, 第18図)

第3地点の北西隅部で、21号掘立柱建物から1m北方で検出した。

東半部が調査区外にのびるため、プランは不明であるが、23・25号土壇同様に、隅丸長方形を呈するものと思われる。

断面部で、幅41cm・深さ20cmを測り、東西方向主軸はN-90°-Eである。



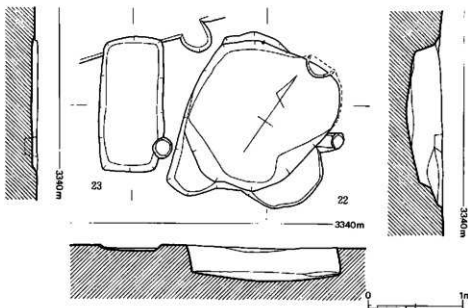
22号土壇 (図版15-2, 第19図)

第3地点の北西部で、21号掘立柱建物から1mほど南方の24号溝状遺構に近接して検出した。

プランは不整形で、数基の土壇が重複しているようにも見えるが、埋土に差位は認められなかった。



第18図 21号土壇実測図 (1/40)

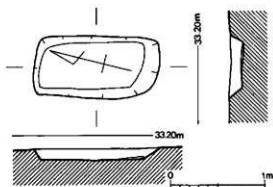


第19図 22・23号土壇実測図 (1/40)

北壁は、床面から14cm上位に最大径があり、断面袋状を呈し、床面レベルは中央が周辺部よりも10cm低いなど、21・23・25号土塚とは平面プランを含めて、特徴が大きく異なる。

おそらく、他の壁も北壁同様の断面形状であったものが崩落したものと思われ、袋状貯蔵穴の可能性が高い。

東・西壁方向を考慮した南北方向主軸は、 $N-0^{\circ}-E$ で、幅146cm・長さ191cm・深さ36cmを測る。



第20図 25号土塚実測図 (1/40)

23号土塚 (図版15-2, 第19図)

22号土塚近くで検出し、24号溝状遺構を切り、北壁部が小ビットで切られる。

断面部で、幅67cm・長さ142cm・深さ6cmを測り、東西方向主軸は $N-33^{\circ}-W$ である。

24号土塚 (図版16, 第23図)

第3地点の西部で検出し、23号溝状遺構を切り、22号溝状遺構に切られる。

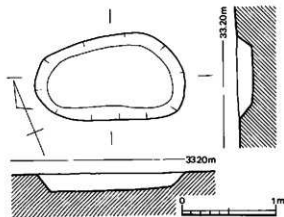
やや不整形ではあるが、隅丸長方形に近いプランである。

断面部で、最大幅124cm・長さ205cmを測り、南北方向主軸は $N-11.5^{\circ}-W$ である。

25号土塚 (図版19-1, 第20図)

第3地点の南端部中央で、26号溝状遺構から2m西方で検出したが、周辺にも数基の土塚様の掘り込みがある。

断面部で、幅66cm・長さ134cm・深さ12cmを測り、南北方向主軸は $N-4^{\circ}-W$ である。



第21図 26号土塚実測図 (1/40)

26号土塚 (図版19-1, 第21図)

第4地点の中央部で、27号土塚

から5m西方で検出した。

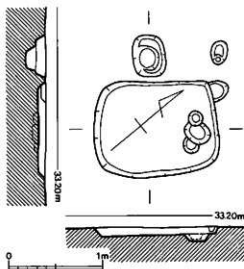
断面部で、幅88cm・長さ157cm・深さ18cmを測り、東西方向主軸はN-63°-Wである。

27号土坑 (第22図)

第4地点の中央部で、46号溝状遺構から5mほど東方で検出した。

土坑内の3個が接するピットは、東西断面図に示すように、東側が土坑床面で検出したもので、中央は西側と共に土坑埋土を切り、西側の方が最も新しい。

断面部で、幅101cm・長さ130cm・深さ10cmを測り、南北方向主軸はN-43°-Eである。



第22図 27号土坑実測図 (1/40)

4. 溝状遺構

溝状遺構 (以下、溝と略す) は、21-30号溝の10条と、41-49号溝の9条、計19条を説明するが、各地点別の検出遺構は、以下のとおりである。

第3地点……21-25号溝と26号溝南部、および42-45号溝。

第4地点……26号溝北部と46・47号溝。

第5地点……27号溝と29号溝北部、および48号溝西側。

第6地点……28号溝南部と29号溝中・南部、および30・41号溝と48号溝東側、および49号溝北側部。

上記のなかで、以下の溝は図版5に示すように

26号溝……中部は、第3地区の瓦粘土採掘坑によって消滅

47号溝……東端部以東からが第4地点で、当初に、第3地点の表土 (耕作土・床土) を第4地点に盛土し、その後第4地点の表土と共に第5地点まで重機で移動した際に、重機のキャタピラのため、浅い47号溝東端部以東が数m消滅

28号溝……第6地点調査終了後に、第4・5地点の表土・排土を重機で移動する際に、上述の47号溝同様に、浅い28号溝北端部以北が数m消滅

49号溝……南側部は、調査区内を西流する農水路と路線境界南側水田への農機進入路確保の

ため、南側への拡張を断念

したものである。

以上のなかで、土層断面観察・調査時の所見などから、各遺構間の切り合い関係による新・旧を古→新で示せば、以下のとおりである。

42号d溝→42号c溝→42号b (a・e) 溝→21号溝

42号b (c・d) 溝→22号 (44号) 溝

42号b (c) 溝→23号溝→24号土壇→22号溝

43号a (b・44号) 溝→25号溝

28号溝→48号a・d溝

48号d溝→48号a溝

49号b (b') 溝→24・25号ピット列群のa・b列

なお、 $\left(\begin{array}{l} 43号と44号溝 \\ 27号溝と48号a溝 \end{array} \right)$ は切り合いがない。

21号溝状遺構 (図版16, 第23図)

第23図に示す土層断面部での検出プランは、上面幅60cm・床面幅34cm・深さ29cmを測る。

床面標高は、第2地点南端および第3地点南端で共に32.85m、断面部が32.83m、北端部が32.93mで、南流する。

また、溝主軸は、42号b溝以南と北端部の22号溝と近接する部分以北では、N-55°-Eを測り、44号溝との重複部～22号溝との近接部以南では、N-39°-Eを測り、前者は22号溝の中央屈折部以北の主軸N-59°-Eとほぼ一致し、後者は22号溝の中央屈折部以南の主軸や23号溝中央屈折部以南の主軸のN-41°-Eとほぼ一致する。

22号溝状遺構 (図版16・17, 第23図)

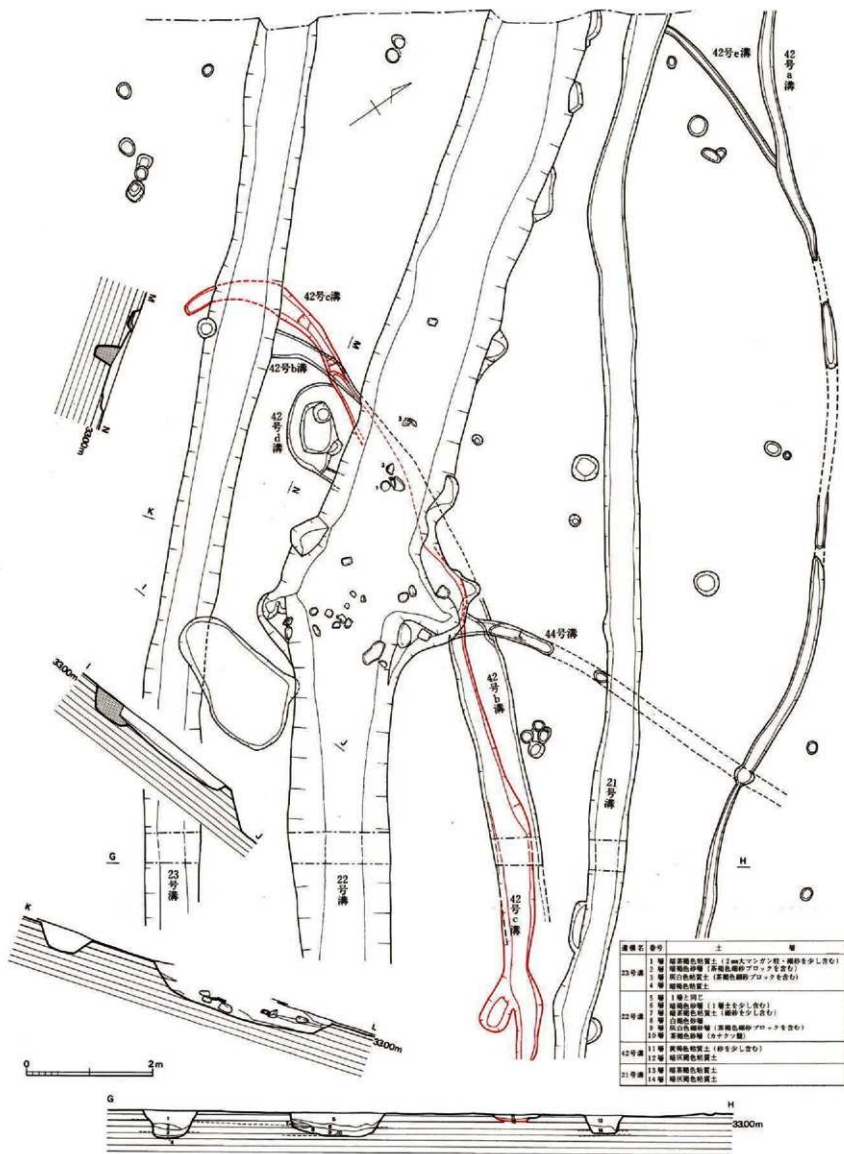
第23図に示す土層断面部での検出プランは、上面幅150cm・床面幅58cm・深さ40cmを測る。

床面標高は、南端が32.70m、土層断面部が32.74m、44号溝合流部が32.68m、北端部が32.74mで、合流部がやや深く、周辺部の地形やD地区出土の溝状遺構なども考慮すれば、南流していたものと判断してよい。

溝主軸は、21号溝で既述したように、44号溝以南がN-59°-Eで、同以北がN-41°-Eを測り、44号溝との合流部で東に大きく屈折する。

ところで、上記の44号溝との合流部では、遺物の出土状態や溝の平面プランに留意すべき点が多く認められた。(図版16・17)

溝のプランは、24号土壇断面部で、上面幅154cm・最小床面幅84cm・床面中央部標高



第 23 図 24号土坑、21-23・42号溝状遺構実測図 (1/60)

32.69mを測り、42号e溝部で、上面幅170cm・床面幅143cm・床面中央部標高32.66mを測るが、44号溝合流部では、幅302cm・床面幅240cm・標高32.68cmを測り、44号溝合流部が上面幅・床面幅共に、一段と大きくなり、溝全体の方向も既述のように大きく屈折する。

また、この合流部では、22号溝東側壁の張り出し部が段状に掘られ、この段直上からは3個の扁平な川原石が出土し、西側壁の張り出し部からも同様に川原石が出土した。

遺物は、第31図の土師器25・26と須恵器10～13が、川原石群と共に出土した。

土師器は、25・26共にほぼ完形に接合できる杯で、44号溝合流部の北側川原石群と共に検出したもので、川原石はいずれも床面から10cm上位の6層（砂）中から出土した。

須恵器は、11を除き、完形に接合できる杯蓋で、南側から順に13（つまみ部下面）、12（同）、10（つまみ部上面）が6層中で、ほぼ水平な状態で、溝中央部から検出され、川原石群は13下位の石が10層直上から出土し、他の川原石も6層中から出土した。

以上のことから、22号溝について、以下のような水口祭祀行為が指摘できよう。

①南側土師器・石群出土部では、44号溝水口部・22号溝下流に対する祭祀行為を示している。

②北側須恵器・石群出土部では、44号溝水口部・22号溝上流に対する祭祀行為を示している。

また、

③南側祭祀では、意識的に土師器杯（身）のみに限って配している。

④北側祭祀では、意識的に須恵器杯蓋のみに限って配している。

さらに、

⑤南側祭祀行為の特徴は、下流部であり、22号溝下流部は44号溝から22号溝への導水・止水機能には直接関係しないことから、日常使用中の土師器に限って配したものであろう。

⑥北側祭祀行為の特徴は、上流部であり、22号溝上流部は44号溝の22号溝への上述機能と直接関係することからこそ、非日常（祭祀など）使用の須恵器に限って配したものであろう。

⑦両祭祀行為の時期は、22号溝が6層（砂）を堆積しつつ流水し、44号溝が22号溝に導水・止水機能中のもので、その後、早い段階で5層（粘質土）で埋没したものである。

なお、④では、古い口縁部形態を残す10のみがつまみ部を上面にやや上流から、新しい口縁部形態を示す11～13がつまみ部を下面にやや下流から、それぞれ対称的に出土したことも、北側祭祀行為の特徴として指摘することができる。このことは、44号溝水口の機能は22号溝上流からの導水・止水機能を前提として働くものであることを思慮（意識）して、意識的に古い器制である10を新しい器制である11～13よりもより上流に配したものと見えよう。⁴⁴⁾

23号溝状遺構（図版16、第23図）

第23図に示す土層断面部での検出プランは、上面幅86cm・床面幅40cm・深さ45cmを測る。床面標高は、第2地点南端が32.83m、第3地点南端が32.84m、断面部が32.71m、北端部が

32.84mとあまり差がないが、21・22号溝同様に南流するものと思われる。

また、溝主軸は、24号土域以北では $N-50^{\circ}-E$ を測り、同以南では21号溝で既述したように、 $N-41^{\circ}-E$ を測り、22号溝同様に中央部で東にやや屈折する。

24号溝状遺構 (図版15-2, 第17図)

第17図に示す21号掘立柱建物のP3-P8部での検出プランは、上面幅88cm・床面幅73cm・深さ15cmを測る。

床面標高は、南端部が33.11m, 23号土域部が33.12m, P7部が33.15m, P5部が33.11m, 北端部が33.12mを測り、ほとんど差がないが、他の溝同様に南流したものか。

また、溝主軸は、 $N-38^{\circ}-E$ でほぼ直線的である。

なお、溝南端の柱穴様小ピットは、21号建物のP2・7同様に溝よりも新しいものである。

また、南端から南方4m以南の第2地点からは、 $P_1 \sim P_8$ 個の柱穴からなる欄状遺構(主軸方位 $N52^{\circ}50'E$)が検出されており、この遺構は第2地点の溝3(23号溝)西方に約4.5m離れている。溝3部の主軸は、 $N-54^{\circ}-E$ を測る(「塚堂遺跡Ⅲ」)。

25号溝状遺構 (付図2)

溝は、南・北端部を除き、東側壁を瓦粘土探掘坑で切られている。

北端部での検出プランは、上面幅60cm・床面幅51cm・深さ5cmを測る。

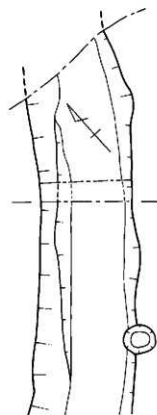
床面標高は、南端部が33.02m, 中央部が33.06m, 北端部が33.08mで、南流する。

また、溝主軸は $N-5.5^{\circ}-E$ を測り、ほぼ直線的である。

なお、埋土は灰白色砂層で、床面はマンガン粒を含み、所謂、カナクソ盤化していた。

26号溝状遺構 (第24図, 付図2)

第24図に示す土層断面部での検出プランは、26号古溝が上面幅98cm・床面幅57cm・深さ28cmを測り、26号新溝が



- 1層 灰白色砂 (マンガン粒を含む)
- 2層 茶褐色粘質土 (1mm大砂を含む)
- 3層 茶褐色細砂 (マンガン粒を含む)
- 4層 茶褐色砂質土 (マンガン粒を含む)

第24図 26号溝状遺構
実測図 (1/60)

同83cm・77cm・深さ23cmを測る。

26号新溝の同部での床面標高は、32.61mである。

また、26号古溝の床面標高は、南端部で32.52m、断面部で32.56m、第4区南端部で32.57m、北端部で32.55mで、やや南側が低く、周辺の地形からも南流していたものと判断される。

なお、第4区の22号ピット列群とは、ほぼ直交する位置関係にあるが、粘土探掘坑で両者共に消滅し、確認することはできなかった。

また、第4区で、溝両側壁部のピットは、南端部の1個を除き、すべて溝よりも新しい。

27号溝状遺構（付図2）

北端部での検出プランは、上面幅158cm・床面幅147cm・深さ7cmを測る。

床面標高は、南・北端部が32.10m、中央部が33.08mで、ほとんど差がない。

また、溝主軸は、東側壁を考慮すればN-30°-Eを測る。

なお、南端部では、向きを西方向に変えて48号a溝と合流する。

28号溝状遺構（図版19-2、付図2）

48号b溝部と28号溝南端部の中間未掘部近くでの検出プランは、上面幅198cm・床面幅190cm・深さ3cmを測る。

床面標高は、48号b溝近くが33.18m・北端部が33.15mで、西流したものと思われる。

溝主軸は、南端部と48号b溝近くのプラン中軸でN-18°-Eを測る。

なお、北端部の溝床面の痕跡は、48号a溝以北にも数mのびて認められた。

29号溝状遺構（図版19-2、付図2）

溝のプランは、南・中央・北部の3箇所断続的に検出したが、床面の痕跡は未検出部でも認められ、調査区北端から南端部の49号a溝まで続くことを確認した。

中央部での検出プランは、上面幅188cm・床面幅182cm・深さ4cmを測る。

床面標高は、南部が33.19m、中部が33.15m、北端が33.15~33.19mを測る。

溝主軸は、北部と南部の両西側壁を考慮すればN-20°-Eを測る。

30号溝状遺構（図版19-2、付図2）

溝中央部での検出プランは、上面幅68cm・床面幅62cm・深さ5cmを測る。

床面標高は、北端部で33.08m、中央部で33.05m、南端部で33.00mを測り、南流する。

溝主軸は、北端部と南端部のそれぞれ西縁を考慮すれば、N-37°-Eを測る。

41号溝状遺構（付図2）

北端部での検出プランは、上面幅113cm・床面幅103cm・深さ7cmを測る。
床面標高は、北端部で32.23m、南端部で33.12mを測り、南流するものか。
溝主軸は、東側壁部を考慮すれば、N-26.5°Eを測る。

42号溝状遺構（図版16、第23図、付図2）

42号溝は、以下のように、a～eの5条に区別した。

42号a溝……調査区の南端～北端の全域で検出した溝。

42号b溝……土層断面図で示す11層の溝で、42号c溝（12層）を切る。断面部から44号溝西端部に切られつつ、23号溝東側壁に切られるまでのびる。

42号c溝……42号a溝南部から分岐し、42号b溝同様に44号溝西端部に切られつつ、23号溝西側壁にも切られて、さらに若干のびる溝。

42号d溝……22号溝内の北側石群部近くの、22号溝と23号溝間で検出した溝で、22号溝西側壁と42号c溝に切られる。

42号e溝……42号a溝北部から分岐し、21号溝東側壁に切られる溝。

42号a溝（以下、42号を略す）の検出プランは、南部のb溝との分岐部で、上面幅42cm・床面幅32cm・深さ4cmを測る。

床面標高は、ほぼ33.07～33.11mを測り、c・e溝との合流部ではそれぞれ2・1cm深く、c・d溝同様に南流するものと思われる。

溝の略主軸は、南・北端の西側壁を結ぶ線を測って、N-40°-E前後である。

b溝の土層断面部での検出プランは、上面幅75cm・床面幅68cm・深さ6cmを測る。

床面標高は、23号溝端部で33.10m、44号溝部で33.07m、土層断面部で33.05mを測り、南流する。

溝の主軸は、土層断面部～44号溝間が西側壁を考慮すれば、N-30°-Eを測る。

c溝の土層断面部での検出プランは、上面幅56cm・床面幅42cm・深さ7cmを測る。

床面標高は、北端部で33.09m、土層断面部で33.00m、21号溝近くで32.99mを測り、南流する。

溝主軸は、b溝とはほぼ同じであるが、21号溝部以南ではより東に屈折してa溝に合流する。

d号溝の全体プランは、22号溝に切られたU字状を呈し、埋土は上層が灰白色砂、下層が黒褐色粘質土で、床面はカナクソ盤化していた。

床面の標高は、22号溝に切られた部分で、33.10mを測る。

e溝のa溝との合流部でのプランは、上面幅12cm・床面幅6cm・深さ2cmを測る。

床面標高は、ほぼ33.11mを測り、溝主軸はN-5°-Eを測る。

43・44号溝状遺構（図版16，第23図，付図2）

43号溝をa・bの2条に区分したが、埋土は44号溝と共に、黒褐色粘質土である。

43号a溝……調査区の南端～北端にかけて検出した溝（以下、a溝と略）。

43号b溝……北部分で検出し、a溝から分岐した溝（以下、b溝と略）。

a溝の南端部での検出プランは、上面幅30cm・床面幅17cm・深さ6cmを測る。

床面標高は、南端部が33.13mで、44号溝との合流部の33.04mにむけて低くなり、合流部では44号溝が33.08cmで、4cm低い。

同様に、21号住居南側では33.07mで、合流部にむけて低くなる。

また、北部分では、北端が33.08mで、南端の33.06mにむけて低くなり、b溝との合流部ではb溝よりもわずかに低い。

溝主軸は、北部分がN-13°-E、22号住居以南がN-55°-Eを測る。

b溝の検出プランは、上面幅15cm・床面幅8cm・深さ4cmを測り、床面標高は33.10m前後、溝主軸はN-29°-Eである。

44号溝の42号b-21号溝間での検出プランは、上面幅23cm・床面幅12cm・深さ4cmを測る。

床面標高は、22号溝との分岐部が33.10mで、東端部の33.06mにむけて低くなる。

溝主軸は、東側部でN-3°-Wを測る。

45号溝状遺構（付図2）

溝中央部での検出プランは、上面幅21cm・床面幅10cm・深さ7cmを測る。

床面標高は33.01-33.05mで、溝主軸はN-85°-Wを測る。

46号溝状遺構（付図2）

溝中央部での検出プランは、上面幅18cm・床面幅10cm・深さ3cmを測る。

床面標高は33.94-32.96mで、溝主軸はN-47°-Eを測る。

47号溝状遺構（付図2）

溝幅最大部での検出プランは、上面幅22cm・床面幅17cm・深さ2cmを測る。

床面標高は、東端が33.02m・西端が32.92mで、西流する。

溝主軸は、東側の直線部でN-55°-Wを測る。

48号溝状遺構（図版19-2，付図2・3）

48号溝は、以下のようにa-d溝の4条に分け、ここではその概要説明にとどめ、後述の23～27号ピット列群の説明で再述する。

a溝……第6地点の東端から検出され、24・25号ピット列群間でd溝を切りつつ、第5地点の27号溝に合流する溝。

b溝……23号ピット列群東側でa溝とd溝間、およびd溝の南側で24号ピット列群と25号ピット列群間で検出し、25・27号ピット列群の共にg列P9-P10間にのびていたと思われる溝。

c溝……a溝北側の24号ピット列群で検出し、25・27号ピット列群の共にc列P12-P13間にのびていたと思われる溝

d溝……24-25号ピット列群間でa溝に切れつつ、第5地点西端部まで検出され、調査区南側境界外にのびるもので、西壁以東では、26・27号ピット列群の共にb列P11-P12間にのびていたと思われる溝。

a溝は、付図3に示す24-25号ピット列群間の未掘部西壁（以下、西壁と略す）での検出プランが、上面幅47cm・床面幅37cm・深さ8cmを測る。

床面標高は、西壁部で33.13m、23号ピット列群西側で33.11m、27号溝以西の西端部で33.07mを測り、西流する。

しかし、西壁部以東では、25-26号ピット列群間で33.06-33.14m、26-27号ピット列群間で33.04-33.07m、27号ピット列群以東で33.00-33.04mと、順次東にむけて低くなる。

このことは、後述するピット列群の機能を考える際の一助となるもので、ピット列群上流部での溝さらえがくり返されたことを示唆しよう。

溝主軸は、西壁以西-27号溝以東間の南側壁を考慮すれば、N-71°-Wを測る。

b溝は、西壁での検出プランが、上面幅45cm・床面幅39cm・深さ5cmを測る。

床面標高は、24・25号ピット列群間で33.15-33.17m、23号ピット列群西側が33.18mを測る。

溝主軸は、25号ピット列群西側と23号ピット列群東側の共に床中央を結ぶ線でN-71°-Wを測る。

c溝は、24号ピット列群西側での検出プランが、上面幅41cm・床面幅36cm・深さ5cmを測る。

床面標高は、東端部の33.20mから西端部の33.15mにむけて低くなり、西流する。

溝主軸は、東・西端床中央間を結ぶ線でN-77°-Wを測る。

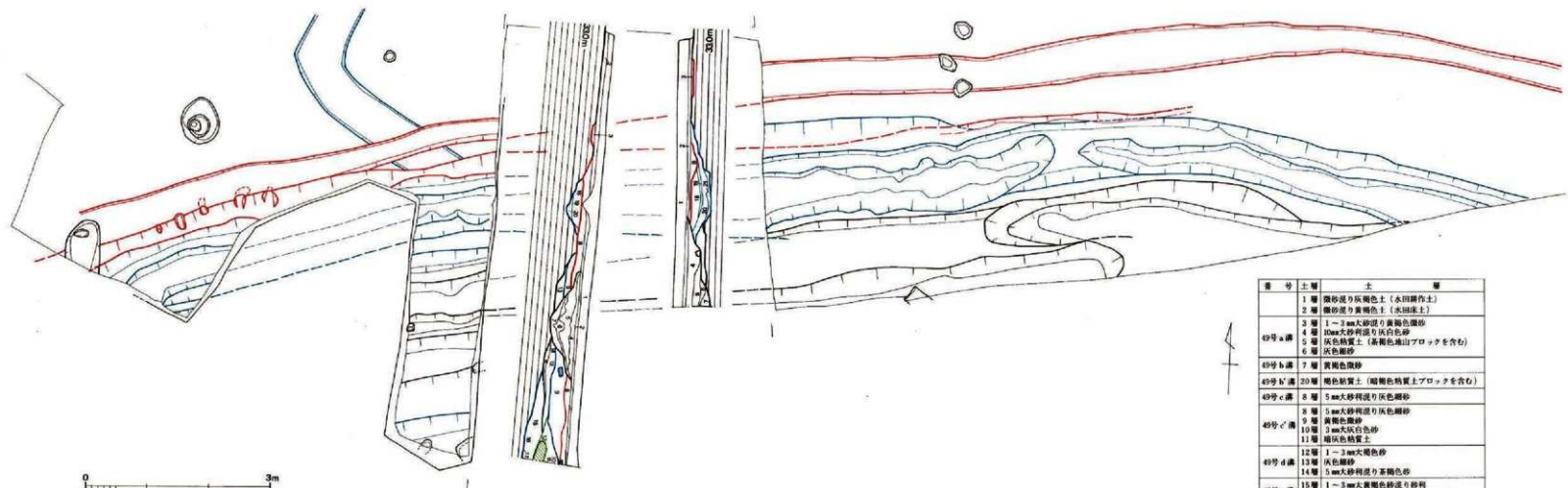
d溝は、西壁での検出プランが、上面幅56cm・床面幅46cm・深さ10cmを測る。

床面標高は、西壁で33.10m、29号溝部で33.07m、西端で33.0mを測り、西流する。

溝主軸は、西壁以西-西端以東の南側壁を考慮すれば、N-88.5°-Wを測る。

49号溝状遺構（図版19-2，第25図）

49号溝は、以下のようにa・b・b'・c・c'・d・e・f溝の8条に分け、第25図では便宜的に4色刷りで示した。



層号	土層	土	層
1層	細砂混り灰褐色土 (水田耕作土)		
2層	細砂混り黄褐色土 (水田耕作土)		
3層	1-3mm大砂混り黄褐色土		
4層	10mm大砂混り灰白色砂		
5層	灰色粘質土 (黄褐色崩出ブロックを含む)		
6層	灰色細砂		
49号a層	7層	黄褐色細砂	
49号b層	20層	褐色粘質土 (暗褐色粘質土ブロックを含む)	
49号c層	8層	5mm大砂混り灰色細砂	
9層	5mm大砂混り灰色細砂		
10層	黄褐色細砂		
11層	3mm大灰白色砂		
12層	褐色粘質土		
49号d層	12層	1-3mm大褐色砂	
13層	灰色細砂		
14層	5mm大砂混り黄褐色土		
49号e層	15層	1-5mm大黄褐色砂混り砂利	
16層	砂利 (黄褐色粘質土ブロックを含む)		
17層	2-3mm大砂混り砂利		
49号f層	18層	2-4mm大砂混り砂利	
19層	褐色粘質土		

第 25 図 49号溝状遺構実測図 (1/60)

各溝の新旧関係は、東・西両壁面の土層断面図に示すように、a(新)～f(古)である。

なお、西壁側をトレンチ部・東壁側を東半部と呼んで説明する。

a溝 東半部では、東壁断面図に示すように、溝の南半部が調査区外で不明であるが、西壁断面図での検出プランは、上面幅178cm・床面幅(7層下面)48cm・深さ42cm(2層下面からの計測、以下同じ)を測る。

また、東壁断面図に示すように、3層で流路の移動、4層で拡幅などが認められる。

床面標高は、東側で32.97m、東壁で32.87m、西壁で32.84mを測り、西流する。

溝主軸は、北縁を考慮すればN-87.5°-Eを測り、他の49号溝の直線部の北縁主軸とほぼ等しい。

b・b'溝 b'は、西端部でb溝と合流するだけで、他の溝から北側に離れて検出され、24・25号ビット列群に切られる。

しかし、両ビット列群が、共にこのb'溝部から北方へのびており、また、共にP1-P2間をb溝が通り、おそらく26・27号ビット列群でもP1-P2間を通ると思われることから、これらビット列群・48号溝との関連が強いものと思われ、このことについては、ビット列群の説明で後述する。

西壁断面図での検出プランは、上面幅35cm・床面幅21cm・深さ6cmを測り、床面標高は33.24mである。

溝主軸は、東壁以西がN-81.5°-E、東壁以東24・25号ビット列群中間以西がN-88.5°-Eで、同以東では、25号ビット列群P8のそれぞれe-g-i列方向のカーブに類似して屈曲するが、このことについても、ビット列群の説明で後述する。

b溝は、西壁断面図での検出プランは、上面幅500cm以上・床面幅467cm以上・深さ10cm前後を測り、埋土は黄褐色微砂の7層で、7層下面の標高は33.13-33.23mである。

このことから、b溝は、むしろ古水田部下層とし、東壁断面図北側の7層の凹みを、水田北端部に設けられた水田内の排水路と判断すべきものであろう。

また、b溝は、このb'溝とした古水田に関係の深い農水路と判断すべきものであろう。

c・c'溝 c'溝のプランは、東壁以東ではa溝に南側壁を切られるが、北壁がb溝に切られていないため、西壁以東のプランよりも良好に遺存する。東壁断面図での検出プランは、上面幅203cm以上・床面幅68cm・深さ33cmを測り、床面標高は32.96mである。

溝主軸は、トレンチ以東-24号ビット列群延長部東側端以内間が、床面中央中軸線でN-0°-Eを測るが、延長部同以東ではN-83°-Wを測り、やや屈折する。

なお、後者のN-83°-Wに屈曲した部分の方向は、24号ビット列群以東の48号方向にほぼ同じで、e溝でも同様のことが指摘できるが、このことは、49号溝が48号溝と関連が深いことを示唆するものであろう。

c溝のプランは、西壁断面部で上面幅336cm・床面幅248cm・深さ33cmを測り、床面標高は33.94mである。

なお、西壁断面図に示すように、c・c'溝は8層を共有し、床面標高もほとんど同じであることから、同一時期と判断してよいだろう。

d溝 トレンチでその一部を検出したもので、西壁断面部でのプランは、上面幅78cm以上・深さ55cm以上を測り、14層中からは、床面に接して18×36cm以上の大きな石が出土した。

e溝 西壁断面部での検出プランは、上面幅282cm以上・床面（15層下面）幅244cm以上・深さ50cmを測り、床面（16層下面）の標高は32.78mである。

溝主軸は、24号ピット列群延長部以西がN-85°-Eと、同以東がN-81.5°-Wを測り、c'溝で既述したようにやや屈曲する。

f溝 トレンチで検出したもので、プランは上面幅148cm以上・深さ74cmを測り、床面標高は32.56mである。

第3～6地点のなかで、径約30cm前後の柱穴様小ピットは、第3地点東半部～第5地点にかけて多数検出したが、掘立柱建物や欄列などのように整然とした配置のものはない。

しかし、これら小ピットのなかで、2個の小ピットが連結したような状態で対となり、連続するピット列群が検出された。

各地点別のピット列群は、以下のとおりである。

第3地点……21号ピット列群

第4地点……22号ピット列群

第6地点……23～27号ピット列群

また、これらピット列群は、いずれも略南北方向に連続し、25～27号ピット列群では、群内がさらに小列に区別でき、24～27号ピット列群はいずれも最大21対が連続するなどの特徴が一致する。

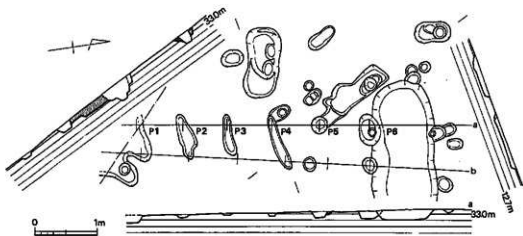
そこで、以下の説明では、連続するこれに対になるピットをPと略し、南から北の方向に順次P1・P2のようにピット番号を付し、各ピット列群内の小列をa列・b列のように呼んで説明する。

21号ピット列群（第26図、表9）

P1～6までを付したが、P6北側では瓦粘土探掘坑のために、P7が消滅したことも考えられるが、後述することから、P1～P4までを検出したことにする。

以下では、P1以南の調査区外にものびるものかどうかについて説明する。

他のピット列群の中で、小規模な列でのP数は4個（25号ピット列群b列）～7個（27号ピット列群i列）であることから、21号ピット列群もP数が4個～8個からなる小規模な列と



第 26 図 21号ピット列群実測図 (1/60)

考えることもできる。

しかし、23-27号ピット列群は、大・小列規模いずれもその中央部に溝を伴い、大規模列(a-c列)ではその南端部にも溝を伴う(22号ピット列群も同様に48号溝延長部まではのびるものと思われる)が、21号ピット列群では溝が検出されていないことから、P1以南にものびる大規模列と判断すべきであろう。

このことは、P床面標高の特徴からも指摘することができ、表9にも示すように、大規模列P床標高は、いずれも南・北端P部が最も高く、中央部Pにむけて順次低くなる。

21号ピット列群でも、北端のP4から南方へ順次低くなることから、P1以南にも数多く連続する大規模なa・b列と判断したもので、P5・6はこの床面標高の特徴や平面形・出土位置などから除外した。

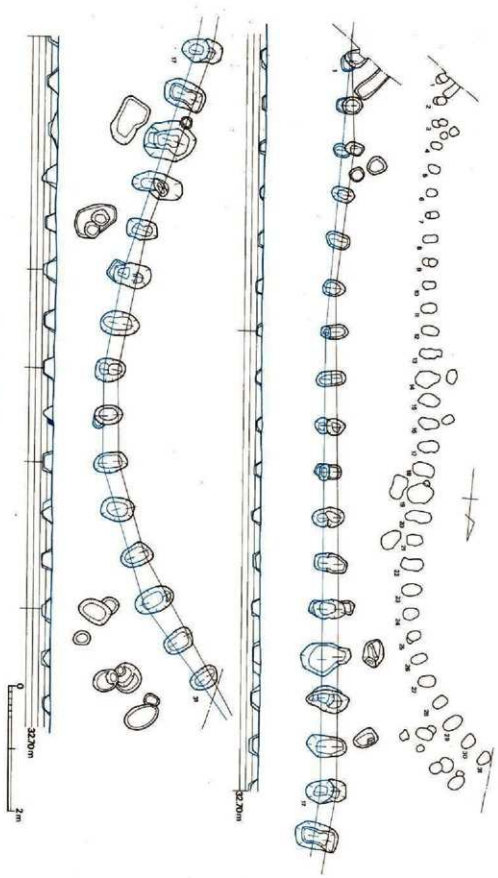
なお、この24号ピット列群は、48号溝の西側延長部までも連続することも充分に考えられ、このときの全長は約30mとなり、49号溝の延長部までも連続するときの全長は約60m以上となる。

ピット列群主軸は、a列でN-8°-E、b列でN-11°-Eである。

22号ピット列群 (図版19-1, 第27図, 表10)

P1-31までを検出したが、P1以南では48号溝まではのび、また、P31以北でも更にのびるピット列群である。

ピット列群の方向は、a・b列全体では、P1-25まではほぼ直線的にN-5°-E (P1・25の共にa列西縁を結ぶ方向) 方向でのび、P26以北で屈折してN-32.5°-W (同P26・31西縁) 方向にのびる。



第 27 图 22号ピット列群実測図 (1/60)

線) 方向にのびる。

なお、第27図にはb列屈折中軸断面図中に、各b列屈折断面部からのa列屈折中軸線部での断面をも合成して示した。

23号ビット列群 (図版19-2, 第28図, 表11)

a列はaP15~21, b列はbP14~21までを検出したが、24~27号ビット列群同様に、両列共にP1~21で完結するものと思われる。

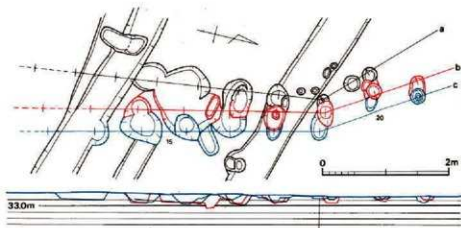
両列と溝との位置関係は、P13~15間に48号d溝, P14~16間に48号b溝, P17~19間に48号a溝を検出したが、後述するc列と共に、いずれもPがこれら溝内に位置することなどから、a~c列共に49号b溝との関連が強く指摘される。

中軸方向は、a列ではaP15~19間がN-10.5°-W, aP19~21間がN-30.5°-Wを測り、b列ではbP14~19間がN-11°-W, bP19~21間がaP19~21間と同様にN-30.5°-Wを測る。

c列は、cP15~20までを検出したが、25・27号ビット列群のc列同様にcP10から始まるものと思われる。

c列と溝との位置関係は、cP17~19間に48号a溝を検出した。

中軸方向は、cP15~19間がN-5°-W, cP19~20間がN-43°-Wを測る。



第 28 図 23号ビット列群実測図 (1/60)

24号ビット列群 (図版19-2, 付図3, 表12)

P1~21まで検出したが、25~27号ビット列群a・b列も同様にP1~21で収束することから、この21個で完結するものと考えられ、特にP1・2については、25号ビット列群も49号b'溝の両端に位置し、他のP方向から大きく東向きを変え、P1以南では検出されていないこと

からも判断される。

ビット列群の方向は、a・b列全体では、P3～P21まではほぼ直線的にN-19.5°-E（P3・21の共にa列西縁を結ぶ方向）方向でのび、P2以南では屈折してN-23°-W（同P1・2西縁）方向となる。

なお、付図3にはa列屈折中軸断面図中に、各b列屈折中軸線部での断面をも示した。

また、b列のP1～7については、明確にa列と区別できなかったが、本来設けられたものが、削平されて消滅したものであろう。

25号ビット列群（図版19-2、付図3、表12）

a列はaP1～18、b列はbP1～17までを検出した。

両列と溝との位置関係は、P1～2間に49号b溝を、P3以北ではほぼ中央部に48号a溝を検出している。

中軸方向は、a列ではaP1～4間がN-10°-E、aP4～18間がN-30.5°-E、b列ではbP1～3間がN-4°-E、bP3～17間がN-28.5°-Eを測る。

また、a・b列間は、aP4～bP4間で55cm、aP17～bP17間で23cmを測り、中軸間距離は北端部に向けて小さくなるが、このことは、aP1～bP1間（46cm）とaP3～bP3間（32cm）でも同様に指摘できる。

上記の特徴からも、両列は対をなすものであって、両列のどちらかが柱穴（枕穴）で、他方がその抜去の際の掘り方というようなビット群ではないことが言える。

なお、前述の55・23・46・32cmの計測値は、それぞれ例えば、2尺・7寸・1尺5寸・1尺などのように、ある程度の計画性をもったものとして指摘することもできよう。

そして、その計画性は、24号ビット列群a・b列、25号a～c列、27号a～c列に顕著に認められ、これらはいずれも49号b溝との関連性が強い。

c列は、cP10～21までを検出した。

c列と溝との位置関係は、cP11～12間に48号a溝を検出している。

中軸方向は、cP10～18間がN-28.5°-E、cP18～21間がN-1°-Eを測り、cP18以北で西に屈折する。

上記の中軸のなかで、cP10～18間とbP3～17間は共にN-28.5°-Eで一致し、cP18～21間のN-1°-EとbP1～3間のN-4°-Eは略等しいなど、このc列はa・b列との関連が強く指摘できる。

また、a・b列よりもより北へのびるc列は、27号ビット列群c列の特徴とも一致し、両ビット列群の関連も強く指摘できる。

d列はdP9～14、e列はeP8～15までを検出した。

両列と溝との位置関係は、dP11-12間とeP11-13間に48号a溝を検出している。

中軸方向はdP9-14間がN-27.5°-E、eP8-15間がN-29.5°-Eを測り、ほぼ等しい。
両中軸方向は、両列部のa-c各中軸方向ともほぼ等しい。

また、dP9-eP9間(131cm)とdP14-eP14間(145cm)のそれぞれ中心は、a・b両中軸間にあり、a・b両列を介して東・西側に対称形配置となっている。

なお、両列のP数は、eP8に対応するdP8が検出されていないが、同様にeP15に対応するdP15も検出していないことから、d列はdP9-14・e列はeP8-15でそれぞれ完結するものと判断した。

f列はfP10-12、g列はgP8-10までを検出した。

両列とも溝との位置関係は、f列でfP10南側で48号b溝、fP11-12間で48号a溝を検出し、g列でgP8-9間に48号b溝がのびていたものと思われる。

中軸方向は、f列がN-16.5°-E、g列がN-24°-Eを測り、中軸間距離が約300cmと大きい割には大略等しい。

しかし、a-d列中軸方向とはその方向差が著しいことから、両列は48号b溝に関連するものと判断した。

このことは、gP10がeP10とiP10に切られていることから指摘できよう。

なお、両列のP数は共に3個で、e列のeP8-10を受けるかのようにg列がgP10-12が検出されていることから、両列共にP数3個で完結するものと判断した。

h列はhP10-13、i列はiP8-11までを検出した。

両列と溝との位置関係は、h列でhP10南側で48号b溝、hP11-12間で48号a・d溝を検出し、i列でiP11北側で48号a溝を検出している。

中軸方向は、h列がN-41°-E、i列がN-8°-Eを測り、その差が大きい。

なお、両列のP数は共に4個で、溝や他のPとの切り合いがないhP13北側やiP8南側で検出されていないことから、両列共にP数4個で完結するものと判断した。

ところで、両列は既述のf・g列と共にP数が少ない小規模なビット列で、f・g列はP10から、g・i列はP8からとその始まりが一致し、また、共にa-c列からの距離が大きいなどの特徴が同じである。

このことから、両列とf・g列は時期的にも近く、両列は48号a溝に、また、f・g列は48号b溝にそれぞれ関連するものと判断した。

26号ビット列群 (図版19-2, 付図3, 表12)

a列はaP1-16、b列はbP9-15までを検出した。

両列と溝との位置関係は、P11-12間に48号a溝を検出しているが、P1-2間には49号b'

溝がのびていたものと思われる。

また、両列と他のビット列群との位置関係は、aP4が27号ビット列群のaP4と重複し、aP16が25号ビット列群のaP16と重複する。

中軸方向は、aP1～4間が $N-10.5^{\circ}-E$ 、aP4～16間が $N-8.5^{\circ}-W$ を測り、bP9～15間が $N-5^{\circ}-W$ を測る。

また、a・b列間は、aP9～bP9間で48cm、aP15～bP15間で69cmを測り、中軸間距離は25号ビット列群a・b列例とは逆に、北端部に向けて大きくなる。

なお、両列のP数は、aP4～16間中軸延長部で、AP4以南・AP14以北にPが検出されず、また、AP4で27号ビット列群に、AP16で26号ビット列群にそれぞれ接することなどから、a列ではAP1～16までの16個と判断した。

なお、25号ビット列群b列のbP16とした平面プランを、その西半部が25号ビット列群b列のbP16、その東半部が26号ビット列群a列のaP16と考えることもできるが、AP4の重複例などからも、aP16も重複し、25～27号ビット列群が共に一連のものとして判断した。

また、P9を北端とする列はd・e列があり、P15北側では中軸延長部にP16が検出されなかったことから、b列はbP9～15で完結するものと判断した。

なお、b列が25号ビット列群のbP17までのびることや、既述の25号ビット列群のbP16プラン東半部へ続くことなども一部には考えられるが、前者ではそのP間距離が他例に比べて大きいこと、後者では南・北両端で共にa・b列中軸が収束する（狭くなる）ことなどから、b列はP15で完結するものと判断したものである。

d列はdP9～11、e列はeP9・10までを検出した。

しかし、eP10の床面標高は33.04mであるが、eP11部での48号溝床面標高が33.06mで、掘り下げる際に確認できなかったものか、溝が一段と低く設けられたときに消滅したものかのどちらかと思われるが、d列と同様にe列もeP9～11の3個で完結するものとする。

中軸方向は、d・e列共に $N-5^{\circ}-W$ を測り、b列中軸方向に一致し、既述のように、b列もbP11が南端Pであることなど、a・b列とd・e列は関連が強い。

27号ビット列群（図版19-2、付図3、表12）

a列はaP1～18、b列はbP8～13までを検出したが、a列のP数は18個、b列のP数は6個で完結する。

両列と溝との関係は、26号ビット列群のa・b列で既述したとおりである。

中軸方向は、aP1～17間が $N-18.5^{\circ}-E$ 、aP17～18間が $N-2^{\circ}-E$ を測り、AP18が東に屈折し、bP8～13間が $N-18.5^{\circ}-E$ で、aP1～17方向と一致する。

c列は、cP10～21までを検出し、24・25号ビット列群が共にP1～21までで完結しているこ

表9 21号ビット列群計測表

遺構群	列	1	2	3	4	5	6	平均	
21号ビット列群	a列	間隔	74	70	72	76	77	74	
		標高	84	96	98	96	94	89	32.93
	b列	間隔	77	77	77	68	68	73	
		標高	84	95	96	95	?	92	32.92

表11 23号ビット列群計測表

遺構群	列	14	15	16	17	18	19	20	21	平均	
23号ビット列群	c列	間隔	65	65	65	64	50	82		65	
		標高	?	12	05	03	08	12	14		33.09
	a列	間隔	75	75	75	73	77	82	69	75	
		標高	?	05	05	04	05	07	03	11	33.06
	b列	間隔	74	70	68	70	72	82	82	74	
		標高	10	07	04	11	10	13	13	08	33.10

表10 22号ビット列群計測表

遺構群	列	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21			
22号ビット列群	a列	標高	71	68	76	74	75	69	74	78	71	73	77	71	77	71	72	71	80	72	76	74			
		間隔	90	95	93	90	90	89	93	89	90	91	86	93	93	89	88	90	88	84	90	76	83		
	b列	間隔	71	71	69	73	78	71	75	74	74	73	70	73	81	61	77	74	71	77	72	77			
		標高	0	97	92	92	92	90	89	88	91	88	85	87	87	88	86	84	84	83	86	83	85		
	列	平均	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	平均	※間隔 cm										
		標高	74	78	74	71	74	76	72	76	72	74	74	74	74	※標高記入例 33.15m→15 33.02m→02									
	a列	間隔	86	82	83	83	83	82	84	83	86	89	32.87	33.0 m→0 32.93m→93											
	b列	間隔	76	80	76	94	76	76	79	74	74	74	74	32.83m→83											
		標高	80	84	82	83	84	83	84	83	85	87	32.93												

表12 23～26号ビット列群計測表

連 続 群	列	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	平均		
24号ビット列群	a列	間隔	48	58	69	72	66	64	55	74	74	65	65	80	76	70	77	76	69	64	68	68	68	68	
		標高	14	15	03	02	16	16	15	16	17	12	14	08	+96	+6	+96	+96	+99	+95	08	09	32.96	32.96	
	b列	間隔								75	72	69	64	79	71	87	65	70	71	70	61	69		71	
		標高								11	17	12	14	06	06	+69	+86	+99	+99	14	07	09	33.04	33.04	
	c列	間隔										69	81	68										73	
		標高										10	6	17											33.13
	d列	間隔										74	70												72
		標高										07	11	16											33.11
	e列	間隔										69	70	81	74	64									72
		標高										12	07	6	10	17									33.10
25号ビット列群	a列	間隔										63	82	75	85	78	97	84	88	63	78	85		80	
		標高										06	6	+6	04	?	16	17	15	15	06	16	33.04	33.04	
	b列	間隔	69	81	77	63	79	73	73	71	74	64	79	78	88	82	85	85	58					78	
		標高	16	16	12	+98	+97	+96	+94	01	02	05	0	+90	04	09	12	10	12	08					33.02
	c列	間隔	74	67	71	78	83	80	66	76	62	72	78	71	96	98	74	70							76
		標高	16	16	16	06	05	+89	02	01	?	09	03	05	03	06	07	06	12						32.98
	d列	間隔										79	75	71	73	73									73
		標高										16	14	13	18	07	16	01							33.12
	e列	間隔										98	83												91
		標高										20	19	12											33.17
f列	間隔										77	67	68											71	
	標高										18	19	15	13										32.16	

から、P数はこの12個で完結するものと判断した。

c列と溝との位置関係は、cP10-11間に48号d溝、cP11-12間に48号c溝を検出しているが、48号d溝との関連が強いと判断した。

中軸方向は、 $N-13.5^{\circ}-E$ を測り、各ビット列群中のP列のなかで、他の中軸と交差（重複）する唯一の中軸列である。

d列は、dP7-10、e列はeP7-10までを検出し、共にP数は4個で完結する。

両列と溝との位置関係は、共にP10の北側で48号溝を検出したが、48号b溝の東側延長部が共にP11-12間にのびていたと考えて、この48号b溝との関連を強く指摘しておく。

また、d列と他のP列との位置関係は、dP7が26号ビット列群a列のaP7東に一部重複することから、両者に時期差が指摘でき、ここではdP7がaP7より新しいとしておく。

e列と他のP列との位置関係では、後述するg列が東に近接して、e列Pと直接重複することなく整然と検出され、両列との時期差がほとんどないことが指摘できるが、ここではe列がg列よりやや新しいとしておく。

中軸方向は、d・e列共に $N-22^{\circ}-E$ を測り、i列中軸方向とも一致し、i列との時期差もほとんどないことが指摘できるが、a・b列中軸方向とはやや異なる。

g列は、gP8-14までを検出し、P数は7個で完結する。

両列と溝との関係は、gP11-12間で48号a溝を検出し、48号c溝の一部も検出したが、48号a溝との関連が強く指摘できる。

中軸方向は、d・e列で既述したように、 $N-22^{\circ}-E$ を測る。

第3節 出土遺物

1. 住居跡の出土遺物

21号住居跡出土遺物

21号A（新）住居からは、多くの土器片が出土したが、小破片ばかりである。

大半の破片が、弥生時代後期のもので、一部縄文時代後・晩期の破片も認められたが、土師器の破片はないので、住居の時期も、21号B（古）住居と共に弥生時代後期としてよいであろう。

22号B（古）住居からは、若干の弥生時代後期の土器小片が出土した。

22号住居跡出土遺物

住居は、大半が瓦粘土採掘坑に攪乱され、削平も著しいので、出土した遺物もわずかで、小

破片ばかりである。

住居の時期は、土師器を含まず、弥生時代前期の土器破片の出土から、弥生時代前期でも古い時期としていいであろう。

2. 掘立柱建物の出土遺物

21号掘立柱建物出土遺物

P1～11のなかで、P1・4～6・8～10からの出土遺物はない。

P2・3・7からは、土師器細片が数片出土し、P11からは弥生時代の甕細片が1個出土したので、建物の時期は古墳時代以降としていいだろう。

3. 土壇出土の遺物

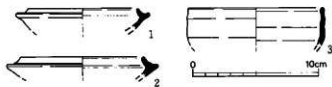
24号土壇出土遺物（第29図）

杯（1～3）1は、器内口縁が体部からシャープに内傾しつつ立ち上がり、器外の受け部上面は、口縁部との屈折部より1.5mm高く外傾する。

器周浅 1/8で、内外共にヨコナデである。口径8.8cm・受け部外径10.7cmを測る。

2は、器外の受け部上面が、口縁部との屈折部からはほぼ平坦に外方にのび、受け部下面は体部からそのまま外傾する。器周残1/8で、内外共にヨコナデである。口径9.9cm・受け部外径12.1cmを測る。

3は、口縁部が高く直立し、端部は丸味を有して厚い。小破片で、体部を欠失するが、口径10.9cmを測り、器高6cm前後の杯身と思われ、器外下位に沈線は認めない。



第29図 24号土壇出土土器実測図（1/3）

4. 溝状遺構の出土遺物

21号溝状遺構出土遺物（第30図）

脚付機（2・3）2は、内湾しつつ立ち上がる体部から、口縁部はゆるく外反し、直線的に端部に至る。器内外共に磨滅し、調整は不明である。器周残1/4で、口径9.9cmを測る。精製胎

土に、1mm大の砂をわずかに含み、焼成は良く、器内外共に淡褐色・器内暗灰褐色を呈す。

3は、腕部上位器周残1/4・下位同3/8・脚部下位同1/4の破片で、腕部器内～脚部器外を丹塗りし、腕部器内に磨痕を認める。器内外共に磨減が著しいが、脚部器外にわずかな縦方向へ方削りの稜を認める。口径16.0cm・腕部高5.5cm前後・器高12.5cm前後を測る。

22号溝状遺構出土遺物 (図版24・25, 第30・31図, 表13・14)

遺物は、主に5・6・9層から出土したが、第31図1は第23図に示した土層断面部から南に160cm離れた位置の10層直上から完形で出土した。

また、同10-13・23・24は、第23図の土器出土状態断面図に示すように、9層直上からしたもので、祭祀に伴う一括遺物と判断してよい。

なお、12・13・14は完形・23・24はほぼ完形に接合できたが、11は器周1/4の破片である。

土師器 (図版24・25, 第30図-4・31図)

皿 (第31図14~17) 14~17の法量平均は、口径17.1cm・底径11.8cm・器高1.5cmである。いずれも器内外共に磨減する小破片で、技法は不明瞭である。

杯 (22・23・25・26) A類の23は、器周残1/4の破片で、口径10.0cm・底径7.0cm前後、器高約3.0cmを測り、磨減が著しい。

B類25・26の法量平均は、口径14.3cm・器高3.4cmである。

口縁部は、25が直立し、26がやや内湾するが、器内面の体部の丁寧なナデ・屈折部の強いヨコナデや、器外面の体部のヘラ削りなど同じ特徴を有している。

22は、器周残1/4の破片で、器内はヨコナデ、器外は磨減して不明瞭である。精製胎土で、焼成は良く、淡褐色を呈す。

高杯 (19・20) 19・20は、それぞれ口径18.8cm・20.0cm、杯部高2.6cm・2.5cmを測る。

19は、杯底部に脚部への屈折部の一部が

表13 22号溝状遺構出土土器計測表①

検出番号	番号	口径	底径	器高	備考
第31図	25	14.1		3.6	土師器
	26	14.5		3.1	◇
	平均	14.3		3.4	土師器
杯 B	14	15.2	12.6	1.6	◇
	15	15.5	13.6	1.3	◇
	16	16.1	12.7	1.3	◇
	17	17.1	11.8	1.6	◇
	皿	平均	16.0	12.7	1.5

表14 22号溝状遺構出土土器計測表②

検出番号	番号	口径	外径	器高	備考
第31図	2	11.2			須恵器
	3	11.8			◇
	5	12.3		3.2	◇
杯蓋 B	平均	11.8		3.2	須恵器
	4	10.1	12.1	3.2	◇
杯	6	10.7	12.5		◇
	7	11.7	13.5		◇
	杯	平均	10.9	12.7	3.2
杯蓋 C	10	13.1	15.6	3.2	◇
	11	14.2	16.2	2.9	◇
	平均	13.7	15.9	3.1	須恵器
杯蓋 D	12	15.9		2.0	◇
	13	16.1		2.1	◇
	平均	16.0		2.1	須恵器

遺存し、高杯であることが明瞭であるが、18もその法量が小皿よりも大きく、底部の器壁も20同様に厚手であることなどから高杯と判断した。

18は、遺存底部の器壁は薄い、高杯であろう。

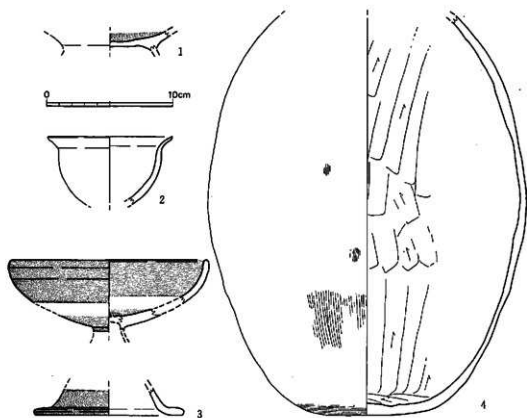
19・20の器周残は、1/4弱・1/4強で、共に器内外が磨滅する。

壺(24・26) 26は、器周残1/4強で、器内外共に磨滅するが、器内の肩部以下にヘラ削り痕を認める。

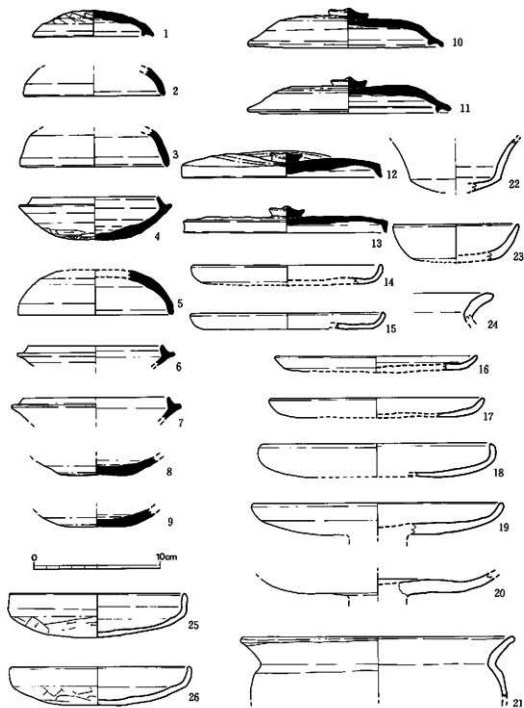
また、第30図の4は、器周残3/8で口縁部を欠失する。器内は、ヘラ削りが明瞭で、器壁は薄い、胎土に7mm大の小石も含み、器内から器外に突出するものもある。器外は、磨滅気味であるが、細いハケ目を認める。

須恵器(図版24, 第31図1~13)

杯蓋(1~3・5・10~13) 蓋を大別すれば、A~Dの4類に分けられる。



第30図 21(2・3)・22(4)・25(1)号溝状遺構出土土器実測図(1/3)



第 31 图 22号溝状遺構出土土器実測図 (1/3)

A類は1で、口径7.9cm・外径9.6cm・器高2.1cmを測る。器内は、天井中央部に弱いナデを加え、×印のヘラ記号を施す。器外は、天井部に静止ヘラ削りを加える。

A類は、器内天井部から口縁部が強く内傾し、シャープな端部と受け部下面との比高差がほとんどなく、法量も小さい。

B類は2・3・5で、法量平均は、口径11.8cm・器高3.2cmである。

B類のなかで、2・5は体部下位がさらに短く下傾するが、3は天井部から下傾した体部は直線的に口縁部となる。5は、器内天井部にナデを加え、器外天井部に回転ヘラ削りを施し、3条のヘラ記号の一部を認める。

C類は10・11で、法量平均は、口径13.7cm・外径15.9cm・器高3.1cmである。

低い擬宝珠状つまみの形状はD類と同じであるが、身受け部の形状に著しい差を有す。

10・11共に、器内天井部にナデを加え、器外は天井部から体部上位に回転ヘラ削りを施し、擬宝珠つまみ部周辺はヨコナデである。

D類は12・13で、法量平均は口径16.0cm・器高2.1cmである。

12は、天井部のひずみが著しく、器外天井部からシャープに屈折した口縁部は断面部では変形して外傾するが、変形部以外は13同様にほぼ直立する。

13は、器外の天井部中位から口縁部との屈折部にかけて、径16cmで器周1/4部の重ね焼きの焼成痕が観察できることから、同じD類を重ね焼きしたことが認められる。

また、13には同様に、擬宝珠つまみ中央部から天井端部にかけても径7.6cmで器周1/1の重ね焼きの焼成痕が観察できる。

12・13共に、器内天井部に整然としたナデを放射状に加え、器外は天井部に回転ヘラ削りを施し、擬宝珠つまみ部周辺はヨコナデである。

杯(4・6-9) 法量の平均は、口径10.9cm・外径12.7cm・器高3.2cmである。

4は、器内底部にナデを加え、器外は体部下位から底部にかけて静止ヘラ削りを施し、V字状のヘラ記号を認める。

25号溝状遺構出土遺物(第30図)

碗(1) 器周残1/1の底部片で、高台部を欠失し、磨減が著しいが、器内面内黒土器である。

48号溝状遺構出土遺物(第32図)

土師器

細片が出土しただけで、図示できるものはない。

須恵器

杯(1・2) 1は細片で、口径9.5cm・受け部径12.0cm前後、2は器周残1/8の小片で、口

径約11.8cm・受け部
径14.0cmを測る。

2は、器外の体部
下位に回転ヘラ削り
を認める。



第 32 図 48号a溝状遺構出土土器実測図 (1/3)

49号溝状遺構出土遺物 (図版25, 第33-37図, 表15・16)

49号溝は、第25図の土層断面図のうち、東壁土層図以東が第6地点で、西壁土層図以西が第5地点にあたる。

調査は、既述のように、第6地点終了後に第5地点を調査したが、第6地点では、49号a溝3～6層出土の土器を層別別に収納しなかったため、第36図に示した。いずれもヘラ切り底である。

第33～35・37図は、第6地点の発掘を考慮して掘り下げた際の出土遺物で、第33・34図がa溝上層(3・4層)・第35図がa溝下層(6層)で共に砂層からの出土で、5層の粘質土からはほとんど出土していない。

また、第37図1～6は、c溝の8・10層の砂層出土土器で、9層からは出土せず、11層の粘質土からはほとんど出土していない。

なお、第37図7は、西壁断面図の16層に示した高杯で、e溝床面に接して出土した。

49号a溝下層 (図版25, 第35図)

杯(1～15)杯を大別すれば、A～Dの4類に分けられる。

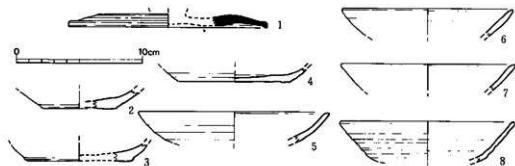
A類は1・4で、平均法量は口径12.1cmを測る。器壁は厚手で、内湾気味の体部から、1は口縁部が外反し、4は口縁部上面が外傾する。

B類は2・3・5で、平均法量は口径12.2cm・底径6.9cm・器高3.0cmを測る。器壁は薄手で、直線的な体部からそのまま口縁部となる。5はヘラ切り底である。

C類は6～9で、平均法量は口径13.1cm・底径7.4cm・器高3.4cmを測る。ほぼ直線的な体部から、6・8はやや口縁部が外反し、9はそのまま口縁部となる。

表15 49号a溝下層出土土器計測表

層別番号	番号	口径	底径	器高	備考
第35図	1	12.0			
	4	12.2			
	平均	12.1			
	2	12.1	3.0	6.7	
	3	12.1			
杯 A	5	12.5	2.9	6.9	
	平均	12.2	3.0	6.8	
	6	12.6	3.3	7.6	
	7	(12.8)	(3.4)	7.1	
	8	13.1	3.4	7.6	
杯 B	9	13.1	3.4	7.4	
	平均	12.9	3.4	7.4	
	11	13.6	4.1	8.6	
	12	14.0			
杯 D	平均	13.8	4.1	8.6	



第33図 49号a溝状遺構上層出土土器実測図(1/3)

いずれもヘラ切り底で、6は、灯明皿に使用した際の煤が付着する。

D類は11・12で、平均法量は口径13.8cm・底径8.6cm・器高4.1cmを測る。6は、直線的な体部からそのまま口縁部となり、器内外共に磨滅気味であるが、ヘラ切り底である。

なお、10・13～15はいずれもヘラ切り底で、既述の杯はいずれも器周残1/4前後である。

椀(16～21)16～19・21が内黒土器で、20・21は高台が貼り付け部から欠落する。

17は、器内が底部、および内湾する体部下位から内湾気味の同上位にかけてヘラ研き痕が明瞭で、口縁部は、体部からの器壁厚を变えることなく、わずかに外傾して端部となる。器外は、ヨコナデのままである。外底部は、高台と共にヨコナデが丁寧である。器上半部器周残1/8・下半部同1/1で、口径13.9cm・高台径6.4cm・器高5.4cmを測る。

19は、内湾しつつ立ち上がる体部からそのまま口縁部となり、端部は肥厚する。器内は磨滅気味であるが、体部上位から口縁部にかけて、ヘラ磨き痕を認める。器外は、体部のヨコナデ・底部のナデ共に、丁寧である。器上半部器周残1/8・下半部同1/1で、口径15.8cm・高台径7.7cm・器高6.4cmを測る。

20は、器内底部にナデを加えるが、器外底部はヘラ切り離しのままである。

49号a溝上層(第33図)

土器器

杯(2～8)6～8は、上層のD類と同じ

で、平均法量は口径13.9cmを測る。

5は、第36図3と同様で、口径15.4と大きく、E類とした。

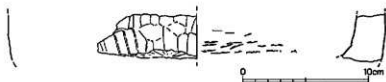
なお、2～4はヘラ切り底で、2～8は器周残1/8前後である。

表16 49号a溝上層出土土器計測表

図面番号	番号	口径	底径	器高	備考
第33図	6	13.7			
	7	14.0			
	8	14.0			
杯D	平均	13.9			
杯E	5	15.4			

須恵器

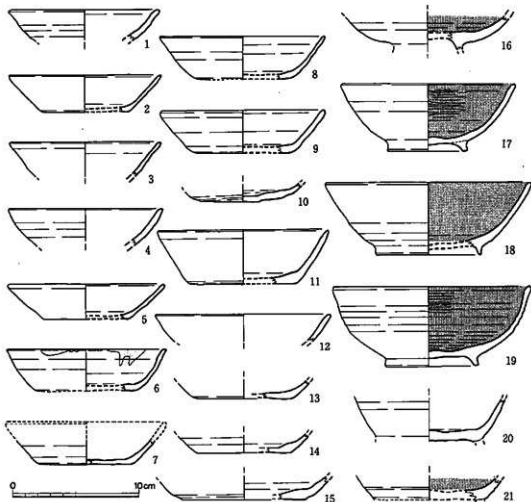
杯蓋 (1) 器周
残1/8の小破片
で、口径15.9cm
を測る。



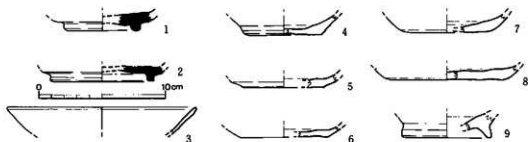
第 34 図 49号a溝状遺構 (上層) 出土石鍋実測図 (1/3)

49号c'溝 (第37図)

杯 (3~5) 3は、器周残1/4の破片であるが、器外底部が磨滅気味のため、底径はやや不明瞭である。4は、器周残1/4強で、器外底部はヘラ切り後に丁寧なナデを施す。5は、器周残



第 35 図 49号a溝状遺構 (下層) 出土土器実測図 (1/3)



第 36 図 49号a溝状遺構出土土器実測図 (1/3)

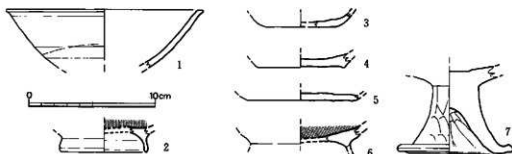
1/1で、器内は磨滅し、器外はヘラ切りのままである。

輪(2・6) 2は細破片で、6は器周残1/4の小破片で、磨滅が著しいが、器内黒色土器である。

白磁器輪(1) 器周残1/8強の小破片で、口径15.6cmを測る。器内には、沈線および軸かき取り段などを認めず、器外は、体部下位にヘラ削りを施す。軸は薄手で、貫入が著しい。

49号e溝(図版25, 第37図)

高杯(7) 器内外共に磨滅気味であるが、脚柱部にヘラ削り痕を認める。



第 37 図 49号c'(1~6)・e(7) 溝状遺構出土土器実測図 (1/3)

5. ビット列群出土の遺物

ビット列群からは、いずれも図示できない細片ばかりが、わずかに出土しただけである。

23号ビット列群出土遺物

a列のaP19から、弥生土器か土師器か不明瞭(以下、弥生~土師と略す)な土器片が1片出土した。

b列のdP16から、弥生土器片1・土師器杯片2が出土した。

c列のdP15から、土師器杯片3が出土した。

24号ピット列群出土遺物

a・b列のP9から、弥生～土師2片が出土した。

25号ピット列群出土遺物

b列のbP13から、弥生～土師4片が出土した。

26号ピット列群出土遺物

a列のaP10から弥生～土師2片、須恵器杯身5片、杯身・蓋不明5片、壘片1が出土した。

27号ピット列群出土遺物

a列のaP16から弥生～土師1片、c列のcP18から弥生土器1片・土師器椀高台2片、i列から須恵器の杯2片が出土した。

また、iP10-11間から土師器の杯5片、須恵器の杯身5片・杯蓋1片が出土した。

第4章 おわりに

「塚堂遺跡」は、第1章でふれたように、「一般国道210号線浮羽バイパス」建設に伴い、用地買収の進行状況に合わせて、1979年度以降、以下の調査を実施してきた。

1979年度 塚堂古墳前方内濠・外濠

1980年度 C・D地区

1981年度 A地区（1次調査）南地点，B地区，塚堂古墳前方部西外濠

1982年度 A地区（2次調査）北地点，E地区1次調査（第2地点）

1984年度 E地区2次調査（第3～6地点）

1985年度 A地区（第3次調査）西地点

1986年度 E地区3次調査（第1地点）

また、上記の路線内の調査の外に、表1に示すような路線外の調査も一部実施されてきた。

このようにして、バイパス建設に伴う塚堂遺跡の発掘調査事業は、調査対象面積18,479m²中の12,768m²を発掘して、1986年度を以って終了した。

そして、上記の発掘調査事業に伴う整理報告事業は、1982年度に報告した第1冊目の「塚堂遺跡 I」刊行以来、第5冊目の本書「塚堂遺跡 V」を1987年度に刊行することを以って終了する。

そこで、本章ではE地区第1～6地点について時代別に概要説明を加えながら、「塚堂遺跡」のA～D地区についても若干触れることにする。

第1節 縄文時代の遺構と遺物

遺物は、第2～4地点の遺物包含層と、第1～6地点までの住居・土壇・建物・溝・ピット列群などの各種遺構から、プラスチック製黄色バンココンテナ（横×縦×深さ：39.7×60.9×14.9cm）1箱に満たないほどの量が出土している。

しかし、上述の各種遺構は、いずれも弥生時代以降に属するもので、縄文時代に属する明確な遺構は確認していない。

遺物包含層も含めての出土土器は、いずれも破片で、しかも細片のものが多く、時期は縄文時代後期～晩期、なかでも晩期が大半である。

また、出土した石製品には、打製の石斧・石鎌などがあり、遺物包含層からも出土している。

ところで、縄文時代の遺物だけの包含層は、黄褐色～暗褐色のいずれも粘質土で、第1地点にはなく、第1地点39号溝南端～第3地点21号建物～21・22号住居～第3地点22号ピット列群北端部付近～47号溝東端部付近にかけての範囲に認められた。

なお、第1地点の遺物包含層は、弥生時代以降の遺物を含まない砂質土（第3図13層）で、また、第2地点の記述包含層以北の地山は、包含層近くが粘質土で、D地区近くになると砂質土に漸進的に移行し、第3～6地点の地山は粘質土であった。

以上のことなどや、第3地点の弥生時代前期の22号住居が縄文期の遺物包含層を切って設けられていたこと、加えて瓦粘土採掘がほぼ縄文期包含層地帯の中央部で行われ、この包含層下の堆積粘土を採掘していることなどから、縄文時代後期～晩期にかけての遺構は、第1地点、および記述包含層地帯外の周辺微高地上に所在していたものが、削平されて消滅したものと考えられる。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

前期でも最も古い時期の遺構は、夜臼式土器を出土した第3地点の22号住居である。

この住居は、塚堂遺跡で確認された唯一の前期に属する遺構であるが、残存壁高が数cmしかなく削平が著しい。周辺にも、既に削平によって消滅してしまった住居が所在していたことが考えられる。

なお、22号住居のプランについては後述する。

中期の遺構は、A～D地区同様に確認していないが、A地区13号住居の埋土中から中期中頃の壺片が出土していることから、塚堂遺跡での中期の遺構の所在がバイパス建設路線外の未調査部分、特にA～C地区南側で考えられる。

後期の遺構は、④第3地点で21号住居（ベッド状遺構を有し、後出か？）を検出したが、後期後半頃の遺構では、⑥第2地点の中央部で1～4号周溝状遺構（1～4号は後期でも新出の長円形・隅丸方形プラン、5号については、溝状遺構として後述）、⑦北端部で7・8号住居が検出されている。

また、第2地点の上述⑥に北接するD地区の後期後半の遺構としては、⑧南端部で1～7・11号円形周溝群（1～5号は古出の小規模円形プラン、7・8号は連のもので新出の大規模隅丸方形プラン、11号は大規模円形プラン）、⑨中央部で6B（古）・10・16号住居と8・9号円形周溝（8・9号は古出の大規模円形プラン）、⑩北端部で19・21号住居と10号円形周溝（10号は古出の大規模円形プラン）を検出している。

以上の④～⑩遺構群と同期の溝との位置関係は、南から北の順に、④後出？の住居1軒～⑩

表17 円形住居プラン一覧表

	塚堂遺跡		三雲遺跡				竹戸遺跡		三雲遺跡	
	E-22住	10住	7住	6住	4住	1住古	1住新	2住	5住	8住
時期	前期初頭	前期後半	前期末葉	前末-中初	中期初頭	中期初頭	中期前半	中期中葉	中期中葉	中期中葉
外円半径R	198	414.75	373.275	290.325	290.325	256.25	307.5	410	373.275	497.7
内円半径r	132	276.5	248.85	193.55	193.55	205	205	205	248.85	373.275
支柱穴r'	66									
r/R	2/3	2/3	2/3	2/3	2/3	2/3	2/3	2/3	2/3	2/3

新出の周溝状遺構群～㉔住居2軒～㉚D地区1号溝(新出)～㉙古・新出の円形周溝群～㉘4号溝(古出)～㉗住居3軒と古出の円形周溝2基～㉕5号溝(新出)～㉖住居2軒と古出の円形周溝となっている。

上述の大略の遺構配置の特徴は、㉙から塚堂遺跡の弥生期の北限がほぼ21号住居で、㉙～㉘間を例外として㉘～㉙、㉙～㉚、㉚～㉛間に溝が設けられており、㉛の16号住居と9号円形周溝間との重複を例外として、住居と円形周溝・周溝状遺構間の重複がなく、㉛の円形周溝群間の重複を例外として、円形周溝・周溝状遺構の重複がなく、北側の㉛から南側の㉘にかけて順次円形周溝・周溝状遺構が新出となるなどが指摘できる。

このように、住居と円形周溝・周溝状遺構の両者には、集落内での整然とした配置区分が認められ、後者の性格や集落内での機能を考える際の重要な鍵となろう。

なお、A地区北端でも円形周溝が1基(隅丸長方形プラン)検出されている。

ところで、既述した前期の22号住居は、支柱穴・主軸間柱穴・壁柱穴などが、中央土壇と共に整然と配された円形床面プランの住居(円形住居)であった。

弥生時代の円形住居は、前期後半～中期中頃にかけては、北部九州で特に一般的に認められるもので、円形床面の中央部に土壇を設け、土壇周辺には環状に柱穴を配する例が多い。

このことについては、福岡県糸島郡前原町所在の三雲遺跡加賀石I-23地区出土例や、同二丈町所在の竹戸遺跡出土例^(註1)で、円形床面(外円)半径をR、環状柱穴プラン(内円)半径をrとして、その関係r/Rを若干検討したことがあった。

三雲遺跡例では、表17に示す6軒の住居のなかで、4～7・10号住居の5軒が共に重複し、8号住居がこれに近接するものである。

前期後半の10号住居のR=414.75cmが、既に中期中葉の5号住居のR=373.275cmを、凌駕しているが、共にr/Rは2/3で変化がない。

しかし、中期中葉の8号住居では、5号住居のR=373.275cmが8号住居のr値となり、R

は479.7cmで $r/R=3/4$ 、 $R \cdot r$ のいずれもが最大となり、大形化している。

この大形化は、内円半径 r で描かれる住居空間の質的拡大が、中期中葉で可能となったことを意味しよう。

また、竹戸遺跡例では、表17に示す3軒の住居が共に重複し、順次増改築されたものである。

中期初頭の1号古住居から中期中葉頃の2号住居に至るまで、 r は205cmと変化がない。

しかし、 R は中期初頭の $R=256.25$ cmから中期中葉頃の $R=410$ cmへと順次大きくなり、逆に r/R は $4/5$ から $1/2$ へと小さくなっている。

この R 値のみの大形化は、内円半径 r で描かれる住居空間の質的变化を伴わないもので、 R の量的拡大に終始したことを意味しよう。

このことは、内円半径 $r \cdot r'$ で描かれる住居空間の拡大が、家屋の上部構造の技術的な発展を前提として初めて可能であることを意味するものであり、以下、これを22号住居で検討してみる。

22号住居例では、表17に示すように、 $R=198$ cm $\cdot r=132$ cm $\cdot r'=66$ cmで、 r/R は前期後半の三雲遺跡と同じで、既にこの2/3タイプが前期初頭、換言すれば弥生時代の頭初から認められることの意義は大きいと言えよう。

しかし、内円半径 r で描かれる住居空間は $r=132$ cmと小さく、まして、 r'/R は $1/3$ で、66cmと極めて小さい。

以上のことは、竪穴住居における住居空間の質的拡大の究極が、 $r/R=1$ であり、弥生時代の円形住居は、その頭初、 $r/R=2/3$ 、 $r'/R=1/3$ で整然と設けられた可能性が強い。

なお、22号住居と同じ前期初頭の円形住居で、同様の整然としたプランをもつものに、福岡県田川郡赤村所在の合田遺跡3号住居例³¹⁾があり、前-中期における円形住居プランの検討資料の増加に期待したい。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

第1地点では遺構は検出していないが、後世の39号溝などから若干の土師器・須恵器破片が出土している。

第2地点では、6号（前期でも古い時期）、3号（前期）、5号（6世紀後半～末頃）、2・4号（古墳時代終末～奈良時代）の5軒の住居の他に、1～3号溝などが検出されている。

上記の溝は、第1次調査では、1号溝からは遺物の出土がなく、2号溝は古相の杯身と新相の高台付長頸壺の出土で時期的な幅があることから後者の土器を採用して7世紀中頃から後半に比定し、3号溝は杯身から6世紀中頃の所産とされている。

第2次調査では、1～3号溝は第3地点でもその延長部をそれぞれ21～23号溝として検出し、以下の知見が加わった。

切り合い関係では、既述のように、42号溝→23号溝→24号土壇→22号溝（43・44号溝）→25号溝の順に新しく、42号溝より21号溝が新しい。

また、出土遺物では、22号溝の第31図1の須恵器杯蓋は6世紀末～7世紀初頭であるが、同図10～13の須恵器杯蓋や22・23の土師器杯の、既述のような出土状態から、22号溝が少くとも7世紀後半までは使用されていたことは確かである。

また、22号溝が設けられた時期は、第29図1～3の6世紀末～7世紀初頭の須恵器を出土した24号土壇の埋土を22号溝が切ることから、7世紀中頃としてよいだろう。

23号溝は、上述の24号土壇に切られることから、第1次調査時の知見を追認し、6世紀中頃としてよい。

42号溝は、上述の23号溝に切られることからその下限が6世紀中頃で、21号溝は7世紀中頃のものであろう。

なお、25号溝は第30図1の内黒土器が出土しているため、上限は9世紀であろう。

ところで、第2地点の5号周溝状遺構は弥生時代後期後半とされているが、第3地点での42号b-d溝が23号溝に切られて出土した状態と、5号周溝状遺構が1号溝で切られた状態との類似などから、これも古墳時代を上限とする溝とすべきかも知れない。

第3～6地点では、以上の遺構の他に古墳時代の遺構と確認されたものはない。

第4節 奈良時代以降の遺構と遺物

第1地点での遺構間の切り合い関係を古→新で整理すると、

31号溝→33(37)号溝・31(32・33)号土壇→34号溝→38号溝→36号溝
31・32・34号溝→近世墓 32号溝 35号溝

となり、31号土壇と32・33号土壇や33・37号溝については、既述のように一連の遺構である。

このことから、遺物では31号土壇の中層から出土した第8図1～10・12～20が、上層出土の同11と共に14世紀頃のもので、他の遺構の時期を考える際の指標としていいだろう。

なお、36号溝については、地元の人から地目境界部に掘られていたもので、36号溝東側の近世墓地に繁茂する竹根の河西側への進入を防ぐ為に利用していたものを戦後に埋めたものであることを教えられた。

しかし、36号溝をいつ設けたかは知らず、38号溝はなかったとのことであった。

ところで、39号溝については、既述のように1次調査の第2地点で検出されていた大溝1～3が、それぞれ39号古溝・中溝・新溝に対応し、39号最古溝が3次調査で新たに検出したもので、『塚堂遺跡Ⅲ』では出土遺物から、大溝2が13世紀頃に流れていたと考えるならば、大溝1は大溝2より早い時期であり、平安時代後半にはつくられていたものと考えられ、それより遡る可能性が指摘されている。

しかし、先述のように39号最古溝は31号土壇よりも新しいという知見が加わったことや、34・35号土壇を既述のように一連の遺構と考え、37号溝より新しい34号土壇からも第10図1を出土したことから、31号溝を14世紀前半、31号土壇（32・33号土壇、33・37号溝）を同中頃、34（35）号土壇を同後半とし、39号最古溝は同後半以降まで下げて考えていだろうか。

ところで、32・34・38号溝はいずれも調査区内ではL字状プランを呈する。

また、31号溝は第2地点では検出されず、39号溝もD地点では検出していないことから、31号溝も、検出した39号最古溝以前の溝（以下、39号大溝と仮称する）に接続して、31号溝と39号大溝でL字状プランを呈し、また、39号大溝と35号溝でもL字状プランを呈していたと考えられる。

なお、35号溝はE地区とD地区間を現在西流する農水路下で検出したものであるが、バイパス建設に伴うこの農水路改修工事の際に、第3地点の21号建物の北側農水路下でも確認（深さ約3m）したので、この農路上流部でも同様に重複しているものと考えてよい。

以上のことから、一定、35号溝（あるいはそれ以前の仮称35号大溝）と39号大溝が13世紀以前に設けられ、31号溝が14世紀前半に39号大溝と接続するように設けられたものとしてよく、35・39号の両大溝は、後述する49号大溝と共に条里遺構として上代まで遡る可能性が強く、35号溝から南方1町に所在する農水路も条里遺構上に所在するものであろう。

なお、これらのL字状プランを呈する溝群は、調査区外ではコ字状あるいは□形状を呈する可能性が高い。

また、39号溝に最古・古・中・新の4期が認められることから、32・34・38号溝は、これら4期のいずれかと一連のものとして設けられ、溝間に土塁を伴った中世集落の遺構の一部としていだろうか。

第2地点では、奈良時代の1号住居と中世の火葬墓の可能性のある4号土壇が検出されている。

第3～6地点では、25～30・41・48・49号溝と21～27号ピット列群などを検出した。

上記の遺構のなかで、25号溝は内黒土器を出土し、49号a溝は下層から第35図に示した9世紀中頃から後半にかけての土器群を出土している。

しかし、49号a溝よりも古い49号c溝からは第37図に示した白磁器碗が出土しているので、溝という性格も考慮して、49号c溝の上限を12世紀頃まで、あるいは13世紀代まで下げるべき

かもしれない。

なお、この49号溝は調査区に近接して南側を現在西流する農水路とはほぼ重複するもので、パイパス建設に伴うこの農水路改修工事が調査区西側農道西部で行われた際に、前述の35号溝同様に農水路下でも確認（深さ約3m）したので、この溝を49号大溝と仮称すれば、農水路と重複しつつ、前述の39号大溝南側延長部に西流する可能性が強い。

また、この49号大溝は調査区西側農道とその西側を現在北流する農水路下でも、前述工事の際に確認されたので、これを50号大溝と仮称すれば、50号大溝は北流して、既述の35号大溝西側延長部に合流する可能性が強い。

以上のように、49号溝は35・49・50号大溝の条里遺構以来現在の農水路まで続くものとしてよいだろう。

つぎに、第3～6地点で検出した21～27号ピット列群の特徴を以下に示すと、

①各ピット列群は、2個の小ピットが連結したような状態で対となって連続する小列が認められる。

②各ピット列群は、必ずこのa・bの2小列を有し、23号にはc列、25号にはc-i列、26号にはd・e列、27号にはc-e・g・i列が加わる。

③各ピット列群は、いずれも大略南北方向にのび、23～24号は必ず溝と重複し、22号も26・48号溝西側延長部までのびる可能性が強く、21号も同様と考えられる。

④24～27号ピット列群は、いずれも最大21対が連続し、この規模の大きい最大列の東・西の両側で、規模の小さいd-i列を検出し、各ピット列群の大規模列を介して小規模列は対象配置となっている。

また、表9～12に示すように、

⑤各小ピットの列方向の間隔は、60cm大が4列で平均67.8cm、80cm大が80cmの1列、90cm大が91cmの1列で、他は70cm大が23列で29列中の79%を占め、その平均は73.3cmである。

⑥各小ピットの床面標高は、各小列断面図にも示すように、いずれも大略その中央部に向けて両端から順次低くなる。

⑦各ピット列群のa・b列の小ピットの床面標高平均は、東側から順に27号が33.05m、26号が33.08m、25号が33.00m、24号が33.00m、23号が33.08m、22号が32.90m、21号が32.93mで、ほぼ東側の27号から西側の21号に向けて低くなり、27号と21号との平均差は12cmと小さい。

⑧各ピット列群のなかで完結して検出した列群のa列小ピット両端の床面標高は、27号P1が33.15m、P18が33.06m、26号P1が33.15m・P16が33.10m、25号P1が33.16m・P18が33.08m、24号P1が33.14m・P21が33.09cmで、いずれも北端が低く、また、各列群の南端P1の標高は33.14～33.16m、北端P標高は33.06～33.10mとそれぞれ差位がほとんどない。

以上のことと、48・49号溝や各ピット列群の遺構説明で既述したことから、各ピット列群中のa・b列は、西流する49号溝(49号b溝を除く)の調査区外の東側上流で49号b溝に分流した水を、P1—P2間で揚水し、南から北方向に導水する木製「形樋」を東西両側から固定した支脚の抜去復列と考えてよいだろう。

また、c—i列は、48号溝に関連するa・b列類似の遺構と考えられ、数次の改築を経たもので、同時期にc—i列が設けられたものではないであろう。

なお、前述のように49号c溝の上限を12世紀頃まで、あるいは13世紀代まで下げるならば、各ピット列群のa・b列の上限もこれと同様としてよく、最も新しい小列も下限は14世紀頃で、一応、古い順にa・b列が48号d溝、c列が48号c溝、f・g列が48号b溝、d・eおよびh・iが48号a溝に関連するものと考えている。

第5節 おわりに

最後に、「塚堂遺跡」と「塚堂古墳」について、若干の補足説明をする。

「塚堂遺跡」の特徴として、縄文時代—弥生時代—古墳時代(5世紀前半)まで所在した住居・貯蔵穴・建物・溝などの集落遺構が、「塚堂古墳」の築造後には、第2地点の6世紀中頃の23号溝が設けられるまで皆無に近く、住居は第2地点に奈良時代の1号住居が設けられるまで、調査された遺跡内には立地しないことが指摘できる。

このことから、硬質縄縞タタキ目土器、硬質青灰色(赤褐色)土器、硬質交差タタキ目土器などの硬質土器や初期須恵器を出土し、初期カマドを付設する多くの住居群が立地する5世紀初頭—前半が、「塚堂遺跡」の「頂域」であると言える。

しかし、遺跡西方約600mに築造された「月の岡古墳」に継続するものとして、5世紀後半近くになると「塚堂古墳」が築造される。

以後、上述の1号住居の奈良時代までが、「塚堂遺跡」は「塚堂古墳」の「兆域」であると言える。

その後、6世紀となり、遺跡西方約500mに、「塚堂古墳」に継続するものとして、「日の岡古墳」が築造される。このことによって、大規模な前方後円墳が3基併存することになり、遺跡は「兆域」を拡大・確立し、現在まで地中に保存されてきた。

1979年度のバイパス工事に伴う事前の発掘調査開始以来、1987年度の記録保存本報告書「塚堂遺跡Ⅴ」の刊行によって、上述した「塚堂遺跡」の土地に刻まれた歴史の一部を、わずかでも明かにし得たことを幸わせとして「おわり」とする。

- 註1 馬田弘毅編「塚堂遺跡Ⅰ」(『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集, 福岡県教育委員会, 1983) なお、本書に関する註を以下では省略し、「塚堂遺跡Ⅰ」と記す。
- 註2 副島邦弘「塚堂遺跡Ⅱ」(『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集, 福岡県教育委員会, 1984) なお、本書に関する註を以下では省略し、「塚堂遺跡Ⅱ」と記す。
- 註3 佐々木隆彦編「塚堂遺跡Ⅲ」(『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集, 福岡県教育委員会, 1984) なお、本書に関する註を以下では省略し、「塚堂遺跡Ⅲ」と記す。
- 註4 馬田弘毅編「塚堂遺跡Ⅳ D地区(第1・2分冊)」(『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集, 福岡県教育委員会, 1984・1985) なお、本書に関する註を以下では省略し、「塚堂遺跡Ⅳ」と記す。
- 註5 住居各部の面積の計測法については、「塚堂遺跡Ⅰ」所収の第161図「C地区6号住居跡面積計測例図」に示したとおりである。
- 註6 「器制」については、「塚堂遺跡Ⅳ」のD地区の9号住居跡出土の、同書第53図-313・314・315の皿の特微説明文で言及したことがある。この皿は、硬質竹管文土器315が完形で住居西壁北土器群から、土師器で315と同タイプの313が完形で同南群から、土師器で埴に施線に穿孔した314が破砕されてカマド前面からそれぞれの出土状態で検出されたものである。
- この3個は、いずれも「住居遺棄・カマド破棄」の祭祀行為に伴う出土例であると判断し、3個それぞれの入手-使用-遺棄に至るまでの、当時の人々の土器に対する思慮が顕著に示された再配置(出土状態)として把握した。
- そして、土器入手-再配置に至るまでの器物(器種・器形)に対する当時の人々の思慮を、「器制」と呼んで(同書81頁)、同11号古・新住居跡出土土器について、例えば古い器制(思慮)をとる埴363が完形で「11号古住居以来使用してきた器制(思慮の土器)」として南壁P54西から、新しい器制(思慮)をとる埴362・364が完形で「11号新住居で使用した器制(思慮の土器)」として北壁カマド内・外から出土したこと(出土状態)を把握(同100頁)した。
- 以上のように、22号溝の水口祭祀についても、古い特徴を有す杯壺10への古い器制(思慮)が、また、新しい特徴を有す杯壺11-13への新しい器制(思慮)が、それぞれ祭祀行為に示されたものと判断した。
- 註7 柳田康雄編「三雲遺跡Ⅰ」(『福岡県文化財調査報告』第58集, 福岡県教育委員会, 1980)
- 註8 中間研志他編「竹戸遺跡」(『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会, 1980)
- 註9 中間研志他編「合田遺跡」(『赤村文化財調査報告書』第1集, 赤村教育委員会, 1985)

圖 版



南東上空から見た塚堂遺跡（A～E地区）とバイパス建設予定地〔1979年12月撮影〕

（1. 塚堂古墳 2. 日の岡古墳 3. 月の岡古墳 4. 塚堂古墳東地区 5. 筑後川）

1. E地区第1地点全景とA・D地区(南東から)



2. 第2地点全景とAからE(第1地点)地区(南東から)





E地区第3～5地点全景とA～E（第1・2地点）地区（南東から）

1. E地区第1地点全景と第2～6地点（北西から）



2. 同第3～5地点全景とバイパス予定地（北西から）



1. E地区第6地点全景(北西から)



2. 同第3-5地点全景(北西から)



1. E地区第1地点全景(東から)



2. 同(北から)



1. 34号土塚断面(西から)



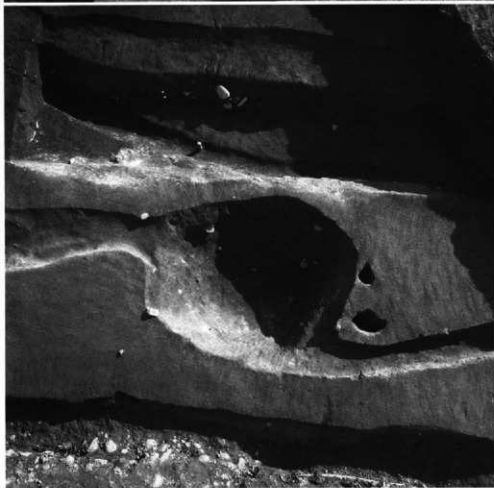
2. 31・33号土塚・32・36・38号溝状遺構(北から)



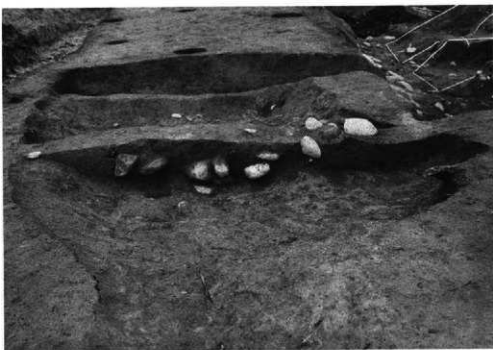
1. 31号土塚断面(西から)



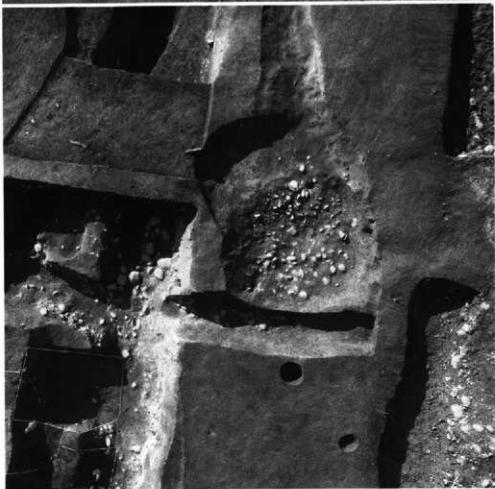
2. 31号土塚、31・33・35・38号溝状遺構(北から)



1.
32・33号土塚断面（西から）



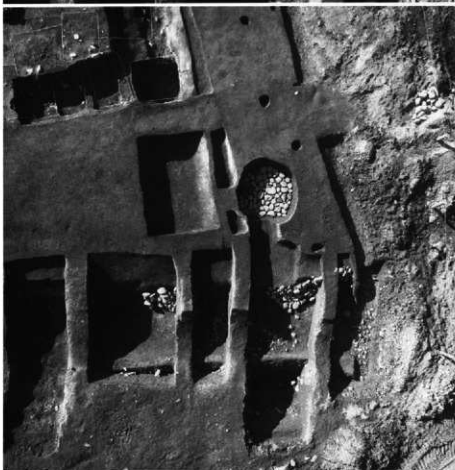
2.
32号土塚、31・33
| 38号溝状遺構（東から）



1. 34・35号土壇、31・34・35・37号溝状遺構（東から）



2. 34・35号土壇、31・34・35・37・39号溝状遺構の合流部（東から）





1. 39号溝状遺構第4トレンチ断面（南から）



2. 同第5トレンチ断面（南から）



1. 39号溝状遺構第7トレンチ断面 (南から)



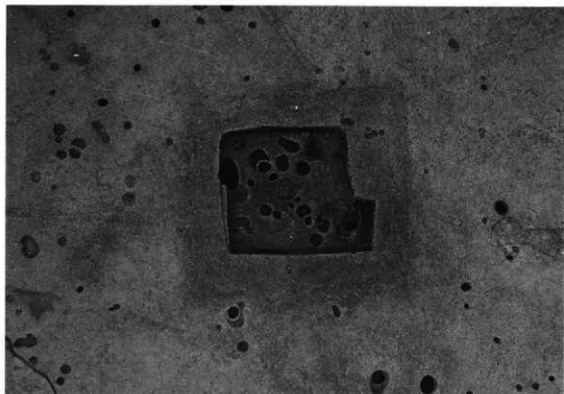
2. 31号溝状遺構断面 (西から)



1. 35号溝状遺構から見た耳納山地（北から）



2. 36号溝状遺構から見た朝倉山城（南から）



1. 第3地点 21号住居跡 (東から)



2. 同 (西から)



1. 22号住居跡（南から）



2. 21号掘立柱建物，21～23号土壇，24号溝状遺構（東から）

1. 22・24号土壇、21・23・42・44号溝状遺構（南東から）



2. 24号土壇、21・23・42・44号溝状遺構（南西から）





1. 22号溝状溝状遺物出土状態 (南西から)



2. 同 (北西から)

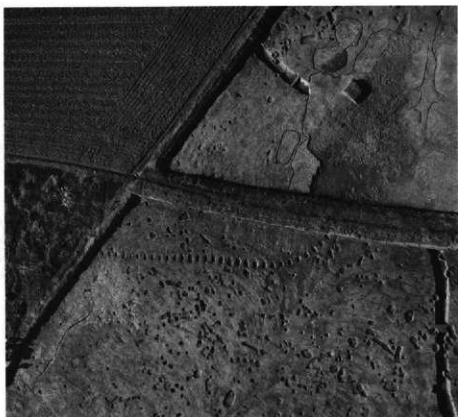
1. 第4地点、第5地点全景（南東から）



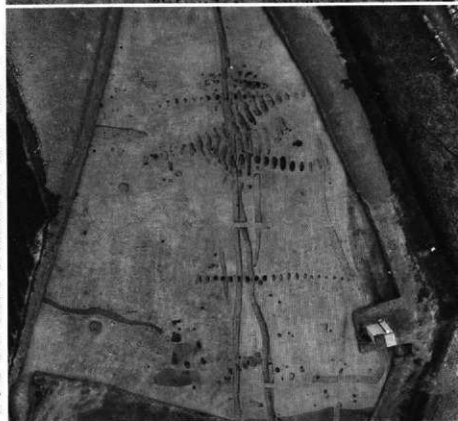
2. 第6地点49号溝状遺構断面（東から）

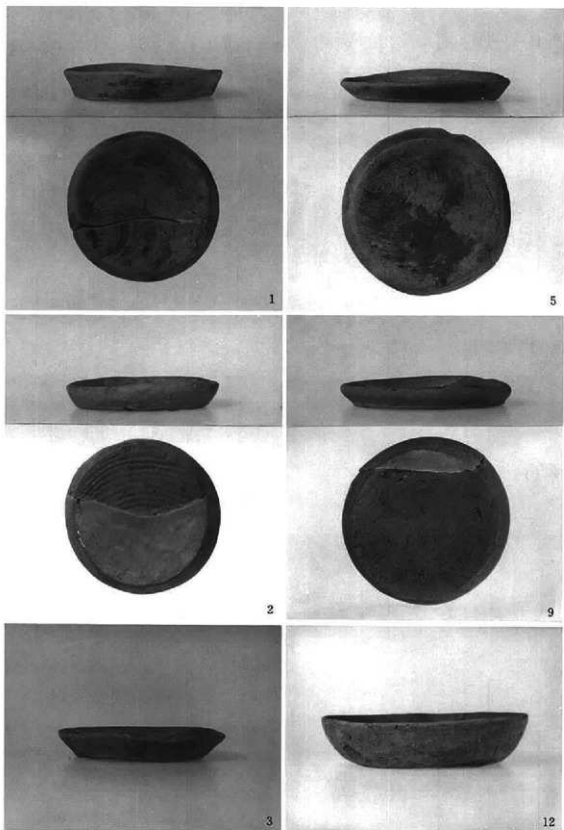


1. 第4地点26号土壇・22号ピット列群
第3地点25号土壇・26号溝状遺構
(東から)



2. 第6地点28・30・48・49号溝状遺構、
23・27号ピット列群
(西から)





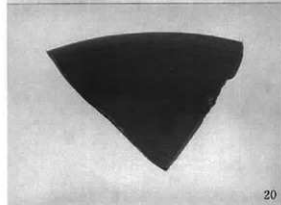
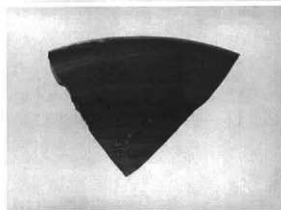
第1地点 31号土坑出土土器①



11



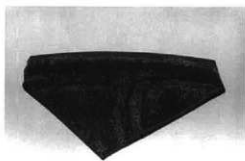
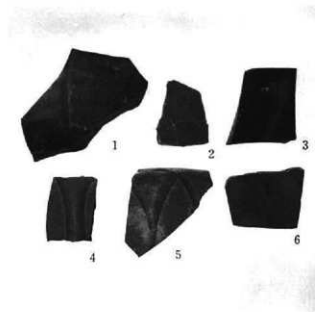
14



20



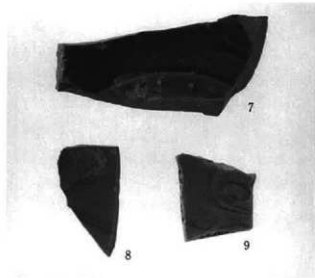
18



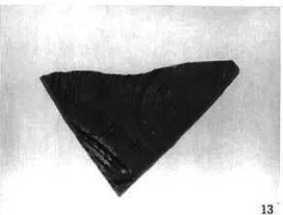
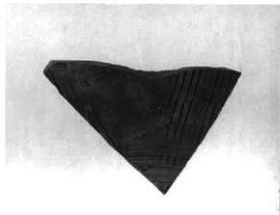
10



11



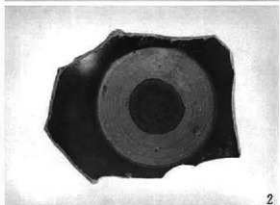
12



13

31号土坑出土土器 ③
32-34·36·39号沟状遺構出土土器

39号溝状遺構出土土器
表探土器



32~34号土坛出土土器

34号沟状遺構・36号沟状遺構・近世墓出土土器



1



12



4



13



10



25



11

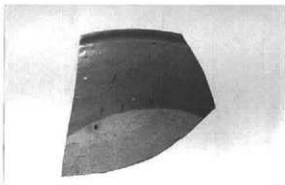


26

第3地点22号沟状遗构出土土器



19



1

第3地点22号溝状遺構出土土器
第5地点49号e溝状遺構出土土器

第6地点49号a溝状遺構出土石鍋・土器

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集

つかんどう
塚堂遺跡 V

1968年 3 月 31 日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会
福岡市博多区東公園7番7号

印 刷 隆 文 堂 印 刷 株 式 有 限 公 司
北九州市門司区畑田1番1号

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 62	登録番号 6